

# 尾張長光寺製塩遺跡

1986

東海市教育委員会

## 序

東海市北部の名和町は、兜山古墳・菩薩遺跡・トヌメキ遺跡など、古い遺跡の多いところであります。この名和町に所在する長光寺遺跡は、曹洞宗長光寺（村瀬至高住職）の境内を中心とした古代の製塩遺跡であります。

本書は、長光寺本堂再建工事に伴い、昭和60年2月及び10・11月の2度にわけて実施しました発掘調査のうち、国庫補助で行った秋の調査の報告書であります。今回の調査におきまして、当地方で最も古い様式の製塩土器を見出しております。

調査にあたり御尽力いただきました調査関係者並びに寺の関係各位、さらに本書の刊行のため御助力を賜わりました関係各位に厚くお礼申し上げます。

本書が、今後の研究の一助となりますれば幸いであります。

昭和61年3月

東海市教育委員会

教育長 築 波 善 夫

## 例　言

- 1 本書は愛知県東海市名和町櫻戸に所在する長光寺製塩遺跡の第2次の発掘調査報告書である。調査は、東海市教育委員会が主体者となり、第1次調査（未報告）を昭和59年度に、第2次調査を昭和60年度に実施した。
- 2 調査区の地区割は任意に設定し1～20（1・2・7・8欠番）の番号を付した。本書で用いた方位は、磁北（西偏約6°20'）である。標高の原点は、東海市名和町北緯90° 国土地理院水準点番号11072（0.4674m）を用いた。
- 3 遺物番号は、土師器・須恵器・灰釉陶器類、製塩土器、瓦に3区分して、それぞれ通し番号を付した。
- 4 文中に付した（注）は、一括して末尾にまとめた。
- 5 本書の作製は、社会教育課職員の協力を得て立松彰が行った。

## 目 次

I	遺跡の立地と歴史的環境	1	
1	遺跡の立地	2 歴史的環境	
II	調査の経過	4	
III	検出した造構	7	
	1 土層の構成	2 土器製塙造構	3 坑
	4 近世の層	5 近世の本室基礎地固め	
IV	出土した遺物	14	
1	弥生土器	2 上師器	3 須恵器
4	灰釉陶器	5 緑釉陶器	6 金属製品・骨角器
7	土鉢	8 製塙土器	9 瓦
10	中世の遺物	11 動物遺体	12 人骨
V	まとめ		33
1	須恵器・灰釉陶器の編年時期		
2	土器製塙造構		
3	知多式製塙土器 4 類の変遷		

## 挿 図 目 次

- 図1 長光寺製塙遺跡と周辺の遺跡
- 図2 調査地区割図
- 図3 層位図（図17-C～D ライン）
- 図4 10区南壁層位図
- 図5 弥生土器・土師器・土師器系土器実測図
- 図6 須恵器・瓷器系中世陶器実測図
- 図7 灰釉陶器実測図
- 図8 鉄器・骨角器・緑釉陶器実測図
- 図9 上縫実測図
- 図10 製塙土器実測図（1）
- 図11 製塙土器実測図（2）
- 図12 製塙土器実測図（3）
- 図13 瓦実測図（1）
- 図14 瓦実測図（2）
- 図15 貝殻断面図（図17-A～B ラインの14区  
南端部分）
- 図16 人骨出土地点図
- 図17 発掘区平面図

## 表 目 次

- 表1 図3 層位図と層説明
- 表2 土種類別計測箇所表
- 表3 瓦観察表
- 表4 貝類組成
- 表5 知多式製塙土器 4 類の変遷
- 表6 造構表

## 写 真 図 版

- 1 11区南壁甕形土器出土状態
- 2 10区灰ブロックおよび瓦
- 3 出土遺物
- 4 製塙土器

## I 遺跡の立地と歴史的環境

### 1 遺跡の立地

長光寺製塩遺跡は、愛知県東海市名和町榎戸1—3、4の長光寺境内に所在する(図1)。本遺跡は知多半島伊勢湾側北端の海岸平地にあり、長さ約500m・奥行約250mの狭小な砂堆上に立地する。さらに細かくみると、長光寺の北にある墓地側がなだらかに下っており、その南の本堂側にある遺跡は、砂堆の高まりの北縁に位置している。旧海岸線は、長光寺の西に国道247号と名鉄常滑線が平行して南北にのびるあたりといわれている。長光寺の本堂のすぐ西にある仮本堂部分の調査結果によれば、遺跡の営まれていた頃の海岸線はもっと東に入り込んでいたと考えられ、海岸線と遺跡との距離は50mほどと推定される。

名鉄常滑線の西方に広がるのが浅山新田で、寛保元年(1741)に開発された。現在は、さらにその地先に昭和18年から埋立造成された石油化学工場などのある臨海工業地が広がっており、本遺跡が沿岸地にあったことを知るすべはない。

知多半島は標高100m以下の低い丘陵性山地からなるが、この丘陵は特に西側(伊勢湾側)では、急斜面となって海岸近くにせまっている。本遺跡もそのすぐ東側には標高20mほどの丘陵がせまっている。土器製塩にあたって、濃縮された海水を煮沸して塩の結晶を得るために膨大な量の燃料を必要としたのであるが、この丘陵地の雜木を燃料として用いたであろう。また、気候も温暖なところであり、天日を利用して海水の塩分濃度をあげるための作業にも適していたと考えられる。当地方に土器製塩遺跡が多い背景の一つに、こうした自然の条件のあったことをあげることができよう。

### 2 歴史的環境

当地には、天白川左岸域に面する知多半島基部の丘陵上に、後期旧石器時代と推定される石器の散布する半野遺跡がある。<sup>(1)</sup>繩文時代になると遺跡が散在するようになる。後期の土器を出土する菩薩遺跡や塚森遺跡は、海岸の砂堆上に立地しており、この時期には砂堆が形成されていたことを示している。

弥生時代の前期には、菩薩遺跡において条痕灰土器の水神平式がわずかに認められるのみであるが、後期になると先の遺跡のほかに住居址を検出したかぶと山遺跡や土器片の出土する觀音寺貝塚遺跡のように丘陵上にも営まれ遺跡数が増えてくる。<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup><sup>(4)</sup>

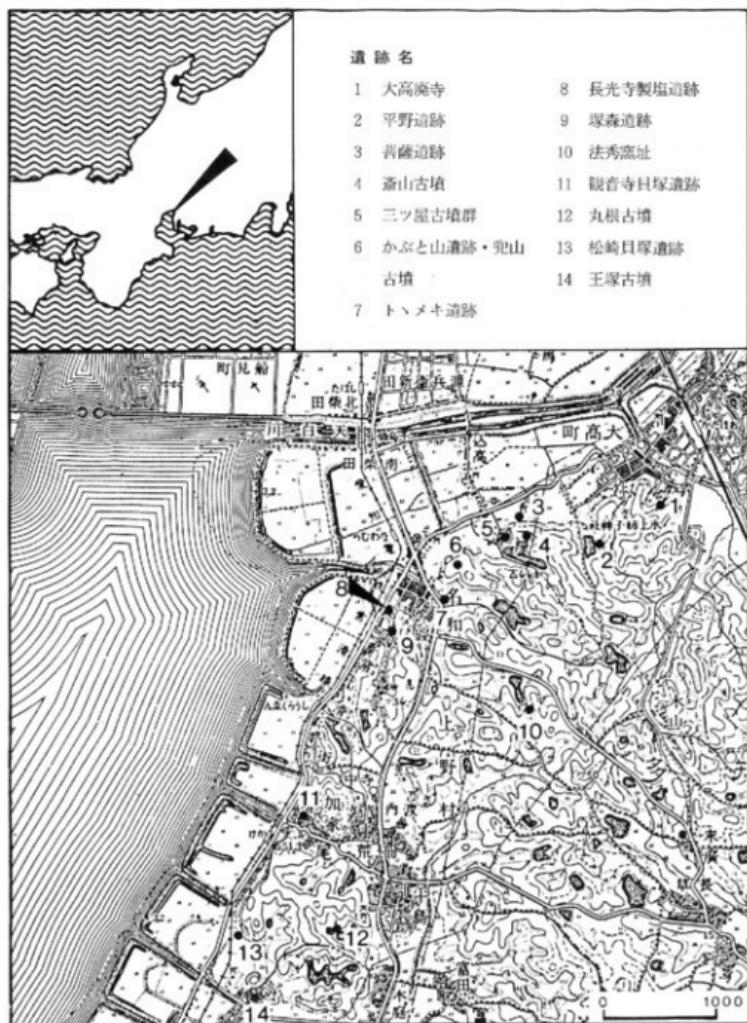


図1 長光寺製塩遺跡と周辺の遺跡

この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭60部復、第381号

古墳時代には、獸文帶三神三獸鏡と捩形文鏡や剪下製石調などが出土した兜山古墳（前<sup>(6)</sup>・Ⅲ期）が築造される。この古墳を築造した勢力は、同時期における尾張地方の古墳の分布と築造された位置からみて、名古屋台地南部の海浜から天白川流域の鳴海浦をへて知多半島基部にあった干潟、いわゆる牛魚市潟一帯から伊勢湾をも支配していたと想定される。塙森遺跡から出土した備瀬瀬戸のものと同型式の製塙土器の存在は、この海浜と海とを支配した勢力が新しい政治体制との関係を直接的に深めつつあったことに起因するのではないかとも考えられる。古墳はこのほかに、円筒形埴輪片が散布する斎山古墳がある。後期<sup>(8)</sup>になると、三ツ屋古墳群（3基）、丸根古墳、王塚古墳が存在し、小地域ごとに小古墳が築造されている。

飛鳥・奈良時代には、今度の調査でも出土したように当地に瓦が多くみられるようになる。最近名和町のトメキ遺跡で発見された細弁蓮華文軒丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、平瓦、丸瓦は白鳳期のもので、名古屋市緑区の大高施寺と同時期である。このほか、八幡社貝塚遺跡、龍ノ脇、少し南に離れて本遺跡、塙森遺跡、堂ノ前貝塚遺跡より奈良から平安時代にかけての瓦が採集されており、これらを葺いた寺院などのあった可能性が高くなってきた地域である。

平安時代も12世紀になると、丘陵斜面に法秀窯址など猿投窯の系譜をひく山茶椀窯が営まれはじめ、中世へ続いていく。

土器製塙遺跡についてみてみると、本遺跡・塙森遺跡・菩薩遺跡・妙法寺・一番畠に製塙土器が散布している。このうち、知多半島基部北端の海岸辺りにある菩薩遺跡では、最近大規模な発掘調査が行われたが、製塙土器は10点ほど出土したのみで製塙が行われたとはみなしがたく、海岸辺りに立地しながらも西側の海浜とは異なる様相を示している。

当地が古代に知多郡と愛智郡のどの郡域に属したのか定かではない。「和名抄」には知多郡に番賀・賀代・富只・但馬・英北の五郷があり、さらに平城宮跡出土木簡には入家里・御宅里がみえる。このうち、番賀郷が半島基部の本市大田町松崎の製塙遺跡を含む北西部一帯に比定され、当地もこの郷に入る可能性が高い。しかし、本遺跡のある名和町に接する名古屋市緑区大高町にある「延喜式」神名帳に記載された水上姫子神社は、古代にあって愛智郡成海郷に含まれていたと推測でき、郡境の不明瞭な地域である。ただ、知多郡に関する平城宮跡出土木簡が「調塙」の貢納札で占められていることからみれば、それと時を同じくする時期にも製塙の行われた可能性のある本遺跡あたりまでは、やはり知多郡域であったとみるのが妥当であろう。さきにみた本遺跡と大高寺の菩薩遺跡との土器製塙有無の違いは、郡域が異なったことに理由があるのかもしれない。

## II 調査の経過

知多半島の海岸辺りには、角形土器と呼ばれる先のとがった素焼きの土器が散布するところが多くみられる。1950年代から1960年代にかけて、この種の土器に注目された杉崎章<sup>(20)</sup>氏や近藤義郎氏らによって、これが海水を煮つめて塙を作った器（製塙土器）の脚になる部分の破片であることがわかつてきだ。

本市北部の名和町でこの土器を最初に目にとめられたのは、吉田富夫氏、池田陸介氏であった。両氏は、堂ノ前貝塚遺跡の発掘調査の際に角形土器が出土したことにより、同種のものが、遺跡の北西約200mにある長光寺にも散布していることを住職の村瀬至高氏から知らされた。池田氏はその後、当地域を余す所なく踏査されてその結果を報告された。それによれば、製塙土器は長光寺とその約150m南にある妙法寺の墓地でよく採集でき、この周辺に土器製塙遺跡のある可能性が高いことがわかる。また、最近に長光寺のある榎戸と境を接する桜森地内において、知多地方で最も古く位置づけられる製塙土器がみつかり、その重要性がさらに増してきた地域である。

このたび、長光寺の本堂が再建されることになり、市教育委員会は仮本堂建設予定地において試掘調査を実施した。遺構はなかったが、多量の製塙土器が出土し、その包含層が本堂部分へものびていることを確認した。そこで、本堂再建にあたっての遺跡の対応について県教育委員会文化財課の指示を仰ぎ、長光寺本堂再建委員会と市教育委員会が協議した。その結果、市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。まず、1985年2月に仮本堂建設部分の調査を行い、10月から11月にかけて本堂部分の調査を国庫補助を受けて実施した。

本堂建設部分の発掘調査は、10月7日から始まり、南側方面（図2-2区～12区）から着手した。本堂の基礎地盤は、石灰をまぜて突き固められており丈夫に堅く、つるはしを用いても手がしひれるほどで難渋した。製塙土器片はこの層にもじっており、本堂の基礎を築いた際に使われた土砂は、堂周辺の製塙土器のまじったものが用いられたようである。基礎の地固めを過ぎると、基礎ほどではないがしまった製塙土器・炭化物・貝殻などのまじった砂層となり、この土層を掘り下げていくと、黄色のさらさらとした砂層に至りこの面で坑などを検出した。これらの坑内を掘り下げるときり方の肩の部分がさらさらの砂なのですがくずれてしまい、坑は本来はもっと上のしっかりしまった砂層から掘り込まれたのではないかと考えられたが、この面での掘り方の検出はできなかつた。

10月25日から北部方面（図2-13区～19区）の18・19区の調査にかかつた。この方面は、

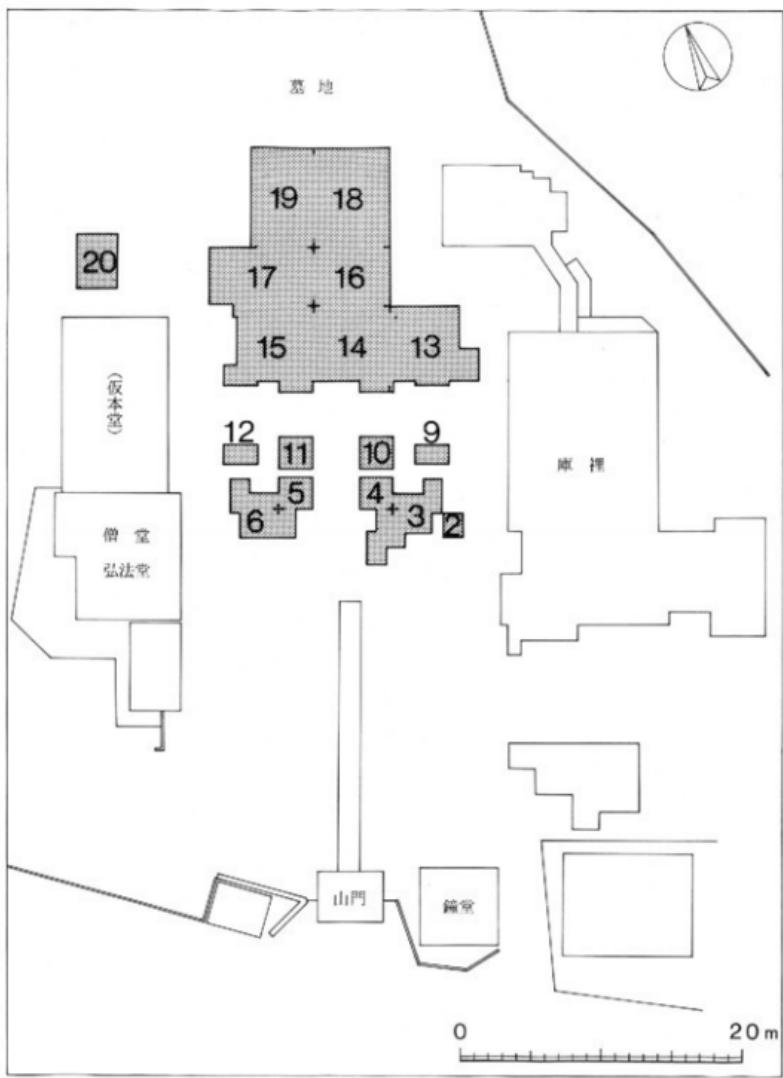


図2 調査地区割図

本堂基礎部分が南側に一部かかるのみで他は基礎上面より約80cm低い。そこを少し掘り下げるとな人骨が何体か出土した。これらの人骨は埋葬されたものであったが、住職も檀徒の方もご存知でなく、本堂の再建された天明5年以前に埋葬されたのではないかと考えられた。とりあえず調査区をかえ、人骨の取り扱いについて県教育委員会へ相談した。県教育委員会から、京都大学壺長類研究所の江原昭善教授に連絡をとってはどうかとの返事があったので、さっそくお知らせしたところ11月5日に現地へおこしいただくことができた。先生からは、人骨の保存状態が案外よくて、埋葬の時期がある程度限定できることなどから学術調査資料として貴重である旨のお話しがあった。そこで、檀徒総代や住職との協議を経て一体ずつ検出して取り上げることにした。

14区で須恵器や灰釉陶器を伴う貝層を検出したが、製塩土器が全区から多量に出土するわりには土器製塩に伴ったであろう明確な遺構を、南部も含めて検出することはできなかった。調査は、北部地区の人骨検出に相当の時間を費やし、11月15日に終了した。

この間、「長光寺発掘調査ニュース」を11号まで発行し見学者に配布するとともに、10月25日の日曜日に約50人の参加を得て現地説明会を開催した。

なお、検出した人骨については江原先生に研究を依頼したが、成果を得るのに時間を要するため、伴出した貨幣や陶磁器類とともに別の機会に公表する予定である。

今次の発掘調査の組織および参加者・協力者は次のとおりである。

調査主体者 東海市教育委員会

調査担当者 東海市立平洲記念館・郷土資料館職員 立松彰

調査参加者 荒木鹿夫、岩崎慎、岡本達雄、小島登、近藤彪、土屋勲、豊田正雄、山口明二（以上、シルバー人材センター東海市高齢者能力活用協会）、大江達子、加藤真司（以上、南山大学学生）、広瀬健一（愛知大学学生）、岩下恵、佐々木伸夫、吉田明幸（以上、日本福祉大学学生）、蟹江敦、泉明良（以上、愛知学院大学学生）、奥川弘成（武豊町歴史民俗資料館）、福岡児彦（東海市文化財調査委員）、坂野俊哉、川崎徹夫（東洋大学学生）、片山武史、近藤直樹（以上、社会教育課職員）

調査協力者 京都大学壺長類研究所教授江原昭善、愛知県教育委員会文化財課教育主事 加藤安信、同中川真文、小島建設株式会社、株式会社ノモス建築設計、亀山建設株式会社

整理参加者 大江達子、小島登、近藤彪、西田アサ子、西田鶴次、山口明二

調査事務局 東海市教育委員会

### III 検出した遺構

#### 1 土層の構成

発掘区内は本堂のあった南部とそれ以外の北部とでは、約80cmの高低差がある。これは本堂基礎の盛土によって生じており、近世に築かれた基礎部分を除いた基本的な土層について記述する。

まず、製塙土器片を混入する堅くしまった黒褐色の砂Ⅰ層（図3・表1—DB層）があり、その下に地区によって異なる間層のⅡ層（図3・表1—II）があり、遺構を検出した黄色砂Ⅲ層（図3・表1—Y層）の地山面に達する。この黄色砂層は、3区南のボーリング調査結果によれば、約3mの厚みをもち下になるほど粗砂となり礫もまじる。その下は厚みが約1.4mの固結シルトがあり、岩盤のシルト岩に達している。

各区の土層は、3区南はⅠ層が30cmほどあってすぐⅢ層に達する。3区東と北および2区・4区はⅢ層面が低く凹んでおり、Ⅰ層が40cmほどあってⅡ層として茶色系統の砂（製塙土器片がまじるもⅠ層よりずっと少ない・図3・表1のBR・LB層）が40cmほど堆積する。

9区と10区は、Ⅰ層が20~30cmあってⅡ層となるが、3・4区とは異なる。9区東では灰色土（灰層）や炭化物を含む薄い砂層が存在し、10区には炭化物を主体にする黒色砂層と砂の固結した厚さ30cmほどの大きなブロックが存在する。10区の炭化物層は9区にはつながっておらず、その間で終っている。

5区・6区・11区・12区では、Ⅰ層が30~50cmあってすぐⅢ層に達する。

13区はⅠ層が50cmほどで、Ⅱ層として褐色の砂が20cmほど堆積する（図3）。

14区はⅡ層として、東にハマグリ・シオフキ・ウミニナ類を主体とする貝層があり、西に4区と同様の砂の固結した面が大きく広がる（図3）。

15区はⅠ層が20cmほどで、その下に10cmほどの炭化物の影響を受けて黒色化した砂が広く分布する（図3）。

16区から19区方面は、近世の墓域で多くの壙がうがたれ攪乱を受けている。そこに堆積する茶色砂は製塙土器片が多くまじっている。この茶色砂は、14区・15区にあるⅠ層・Ⅱ層をつらぬいてⅢ層まで掘られた壙内に堆積する土質と同じものであり、Ⅰ層やⅢ層がまさりあつた結果生じた土層ととらえられる。このことからみて、この方面にもⅠ層が広がっていたと考えられる。

20区はⅠ層が30cmで、その下に製塙土器片のはとんどまじらない茶色砂が40cm堆積しⅢ層に達する。

Ⅲ層面において坑を検出し、その中にも製塙土器が混入していることと、Ⅲ層上面以下には、全く製塙土器が含まれないことからこの面を地山面としてとらえたが、Ⅲ層をさらに掘り下げた結果、その中から土師器壺（図5—2）と土鍤（図9—E）の出土をみた。これらは、Ⅲ層の黄色砂内から物だけが出土しており、Ⅲ層自体は何の変化もきたしておらず、本遺跡において土器製塙が行われる以前のものであることは間違いないが、いかなる理由によって存在したのか明確な解答は得られなかった。

発掘区において製塙土器がまとまって出土する地点は3箇所ある。3区西端中ほどに径60cm・厚さ10cmほどのもの、14区南端に径1.2m・厚さ20cmほどのもの、17区北西端に厚さ5cmほどのものがある。このうち、3区と17区のものは、Ⅲ層上面にあつてきれいな黄色砂にまざっており、砂と製塙土器が相半ばする状態である。14区のものは黒色砂の中に製塙土器が主体をなしてまざっており、前者とは異なる様相を示す。仮本堂地区にも3区・17区のものと同様の製塙土器層が3箇所ある。

全体をみわたすと、Ⅲ層の地山面の高い5・6・11・12区方面では1層が堆積するのみで、造構面が凹む4・10区および低くなる北部方面にⅡ層が介在する。そのうち、10区と14区にある砂の固化したブロック周辺に炭化物層およびその影響を受けた黒色砂層が存在している。

表1 図3層位図土層説明

I	DB 1	黒褐色砂
	DB 2	黒褐色砂に製塙土器混入（硬質）
	DB 3	DB 2よりも製塙土器の混入が少なく堅くない
	DB 4	黒褐色砂に製塙土器・貝殻混入
	DB 5	DB 2と同様だが堅くない
II	DB 6	DB 2と同様だが非常に堅い
	DB 7	黒褐色砂に黄色砂混入
	DB 8	黒褐色砂に橙色土（施肥土）・灰・炭化物混入
	BR 1	褐色砂
	BR 2	褐色砂に貝殻混入
	BR 3	褐色砂に貝殻・炭化物・製塙土器混入
	BR 4	褐色砂に灰色土（灰）・炭化物が少量混入
	LB 1	茶色砂
	LB 2	茶色砂に貝殻混入
	LB 3	茶色砂に貝殻・製塙土器混入
III	LB 4	茶色砂に灰色土（灰）混入
	LB 5	LB 4よりも灰色土が多い
	LB 6	茶色砂に黄色砂混入
	LB 7	茶色砂に炭化物・黄色砂混入
	D G	灰黒色砂質土（硬質）
	B 1	黒色砂
	B 2	黒色砂に炭化物・製塙土器が多量に混入
	B 3	黒色砂質土
	S 1	貝層（ハマグリ・シオフキ主体）
	S 2	貝層（マガキ主体）
IV	S 3	貝層（ハマグリ主体）
	S 4	貝層（ウミニナ類主体）
V	S 5	貝層（マガキ・ウミニナ類主体）
	Y	黄色砂
VI	黒めり	平凡
	縦線	石

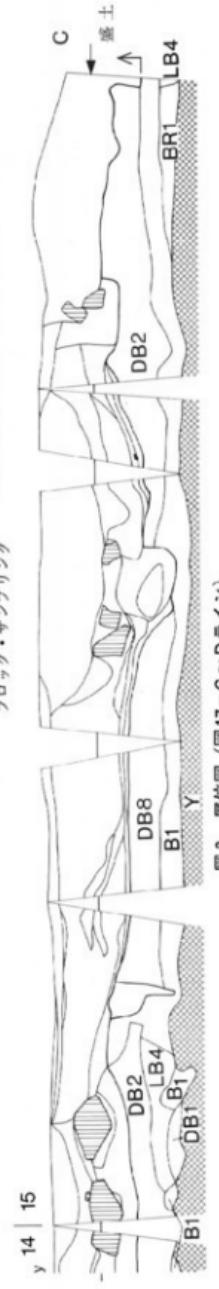
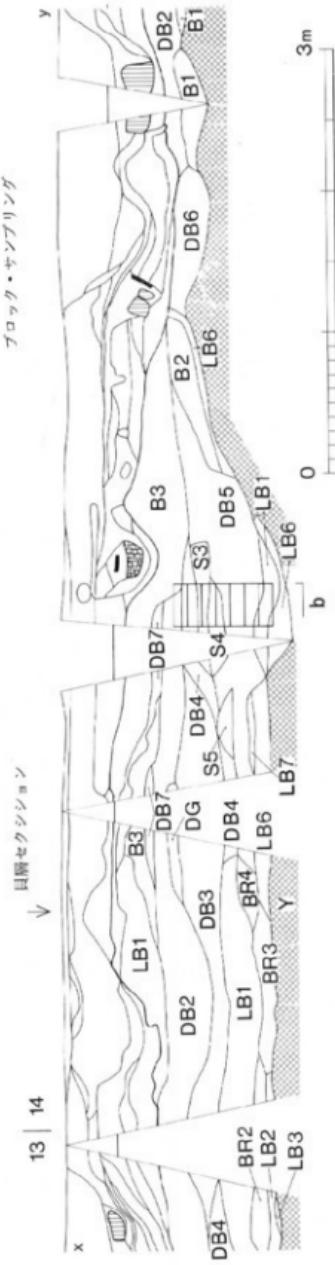
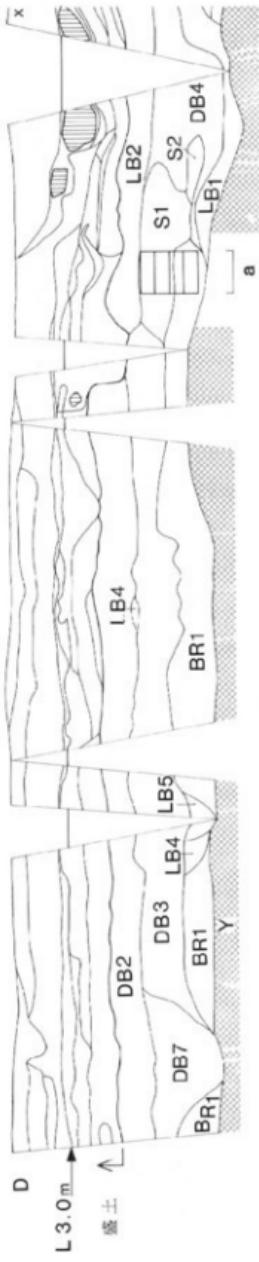


図3 層位図 (図17-C～D ライン)

## 2 土器製塩遺構

明確なものはないが、土器製塩に伴って形成されたと考えられる遺構が数箇所認められる。それは、10区と14区で検出した砂などの固化したブロック（図17-X・Y）と14区のたたき面的様相をもつ部分（図17-Z）である。

Xは10区南西角にあり、未発掘区内にもつながっている。検出した部分は、南壁側の長さ1m、西壁側の長さ0.6m、最も北にのびるところは南壁から1mで、縁が丸みをおびる不整形な形態である。東側は地山面の黄色砂層（Ⅲ層）に掘り込まれた遺構27（図17）の坑内に張り出している。西壁には長辺55cm、深さ15cmの凹みがあり、その下底はⅢ層上面である。このブロックの南壁側断面図が図4-15・16層であるが、ともに同化した硬質の2層からなり、全体の厚みは東側で30cm、西側で15cmほどある。上層は、淡灰緑色の灰を主体とし、わずかに炭化物・貝・製塩土器の細片を含み、東寄りに厚く堆積し西側は薄い。下層はほぼ一律の厚みで、製塩土器・貝・炭化物を混入する黒褐色砂である。この貝は灰黒色に変色しており熱を受けたものとみられる。

Yは14区南にあり、やはり未発掘区内につながっている。南壁での幅が約2.5m、厚みは最大約25cmをはかる。図3-LB6・DB6層がこれにあたり、黒褐色および茶色の砂が固化したものである。この上に製塩土器の多くまじる黒色砂が堆積する。北へは約2.5mのびており不整形な形態である。

Zは14区の北東にあり、Yとは接点をもたない。これは、暗紅色をおびた上半が黒っぽく下半が白っぽい色調の3mmほどの薄い灰色土が幾重にも重なって堆積する面である。北側は壙によって破壊を受けている。残存する部分の広がりは、径1mほどの半円形をなし、最も厚いところは北端の中央寄りで約5cmあり、縁は厚さを減じて終っている。南側は、純貝層の周囲にある混貝砂層に入り込んでおり、貝層と同じ時期に形成されたものとしてとらえられる。

XとYにはその周囲に炭化物層および炭化物混入の影響を受けて黒色化した砂層が広がっている。この遺構については、当初から製塩炉の可能性を考慮できたので注意深く調査したものの発掘区域の制約もあって、それを立証するための成果は得ることができなかつた。

## 3 坑

数多くの坑を検出したがその用途を規定できるものはない。各坑を図17に示す番号によって述べる。坑はみなⅢ層の黄色砂に掘り込まれており、その中に堆積する土層は茶色砂

の製塙土器の細片がはじまる。このことからみて、土器製塙時ないしはその開始期には設けられていたものととらえられる。

24の最も深い穴の下底から縄目叩きを施す布目瓦が2点出土した。25・27・37の落ち込みは平面につながるようにもみえるが、27の底面は25より約20cm低く、37は27より約30cm低いことからみて、それぞれ別の区画をなすのではないかと思われる。30と31は、底面の高さが等しく掘り方の線もつながるようであり同一の造構のようである。

26と35からは石が出土した。26の石は長辺23cm、短辺8cm、厚み5cmの破損したものの、35の石は長辺32cm、短辺22cm、厚み10cmの平らな丸いものである。35の石などは、さらさらの砂中に柱などを建てる際の土台として工夫されたもののようにもみうけられるが定かではない。なお、26と35の石間は4.3mあり、35の石が14cm高い位置にある。

#### 4 近世の壙

図17—16～19区にある坑はすべて墓穴である。これらの埋葬時について、本堂の再建された天明5年（1785年）以前の近世であったと考えている。その理由として次の3点をあげることができる。①ほとんど現地表面近くから掘り込まれ、埋納品として寛永通宝を6枚伴出する人骨が多い。②一部この壙の上に存在する本堂・位牌堂・開山堂の基礎地固めは、次項で詳述するが天明5年の再建時のものとみられる。③この地区では、近代においては確実に両墓制がとられており、本堂の北にある墓地は参り墓で埋め墓は別地点にある。この墓制の初現は不明であるが、近世に逆上って存在したことが考えられる。

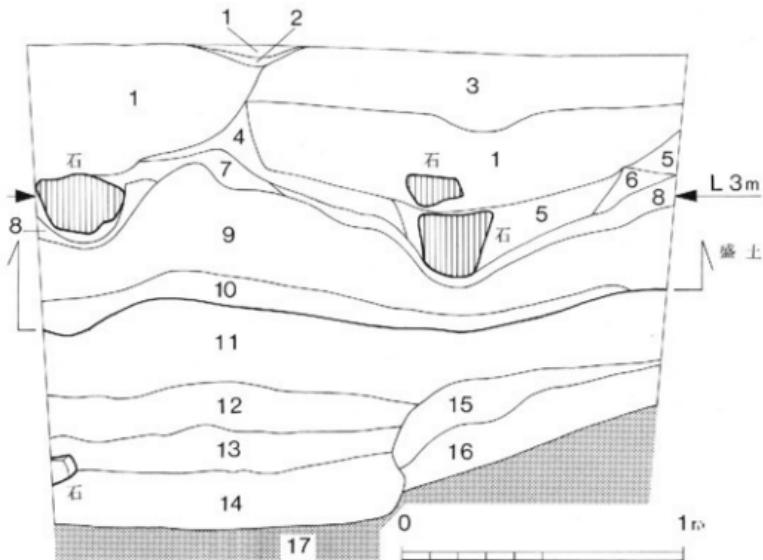
#### 5 近世の本堂基礎地固め

<sup>(23)</sup> 本堂は棟札によれば天明5年に再建されている。ここで述べる基礎地固めもこの時に行われたと考えられる。それは、今次の解体によっておろされた鬼瓦の一つに宝曆6年（1756年）の銘をもち、軒先にあった瓦の瓦当文様とは異なる文様をもつものがあり、これと同じ文様をもつ瓦片が3区の基礎地固めより下の層から出土していることから推定できる。

基礎構築の方法は次のようである（図4）。地固めの上には製塙土器片が混在しており、当地周辺の土砂を用いたようである。これに石灰などをまぜて区画内を突き固めている。柱の建っていた箇所には、地中に根石が置かれており、この部分は特に念入りに構築されている。根石の大きさは大小様々で、10cm角から40cm角ほどの石がおおむね10個前後置かれ程1mほどをなす。そしてさらに全域を突き固め、根石を置いたところの上にのみ疊まじりの粘土（いわゆる正土）を径2m、深さ40cmほどの凹みに入れ突き固めている。この上に柱を置く方形の礎石が置かれていた。

基礎地には、図3の層位図にもみられるように平瓦がまじり込んでいるが、これは天明5年の再建時以前のもので、鬼瓦の年代に対応する時期のものではないかと考えられる。

なお、これらの瓦は後節で述べる韻叩きのある布目瓦とは全く異なり、現代のものと同様の成形品である。



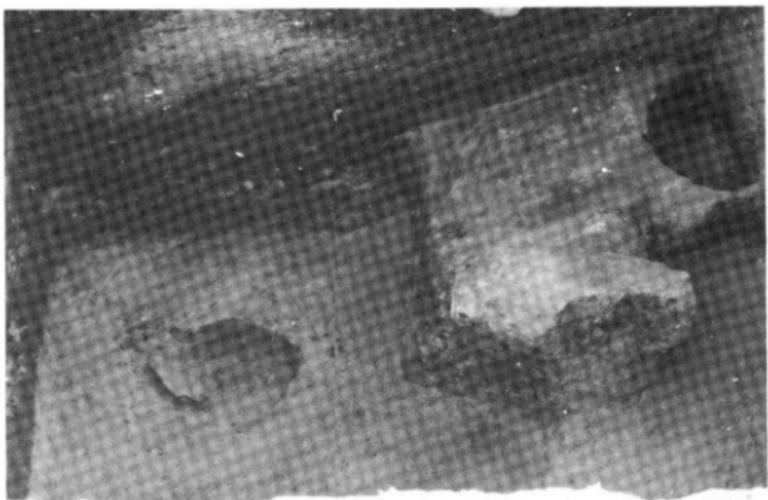
#### 土層説明

- |                       |   |                                       |
|-----------------------|---|---------------------------------------|
| 1 疋混入粘土。桃・橙色<br>(正土)  | 9 4と同じで製塩土器、貝<br>炭化物混入                      | 13 炭化物層で製塩土器、貝<br>混入                  |
| 2 灰色シルト               | 10 9と同じで灰色土ブロック<br>クがまじらない                  | 14 茶色砂、製塩土器、貝少<br>し混入                 |
| 3 1(主体)と2がまざり<br>あった層 | 11 黒褐色砂、製塩土器混入、<br>9ほど堅くない(図3の<br>D B 2に対応) | 15 淡灰緑色の灰層(硬質)、<br>製塩土器、貝、炭化物少<br>量混入 |
| 4 黒褐色砂質土(硬質)          | 12 11と同じだが、貝、炭化<br>物が多くて大きい                 | 16 黒褐色砂、製塩土器、貝、<br>炭化物混入(硬質)          |
| 5 灰茶色砂質土(硬質)          |   | 17 黄色砂                                |
| 6 灰茶色砂(硬質)            |   |                                       |
| 7 黒色砂質土(硬質)           |   |                                       |
| 8 茶色砂(硬質)             |   |                                       |

図4 10区南壁層位図



写真図版1 11区南壁縦形土器出土状態



写真図版2 10区灰ブロックおよび坑（北から南）

## IV 出土した遺物

遺物は、人骨を別にして整理箱27箱分が出土している。このうち、製塙土器が圧倒的に多数で、ほかのものは多種類だが数量は少ない。

なお、以下の遺物出土層位については、Ⅲ—I節のI～Ⅲ層および図3・表1の土層説明記号を用いた。

### 1 弥生土器（図5—1）

6区I層から高杯形土器が1点のみ出土。小片であるが、内外面ともへらみがきが施されており、杯部が大きくて深く底面に稜をもつ欠山式の特徴をもつ器形のものとみられる。I層内に1片のみ出土をみた資料であり、おそらく他所（塚森遺跡方面）から土砂等の移動に伴い運ばれてきたものではないかと思われる。

### 2 土師器（図5—2～11）

甕形土器しかみられず、製塙土器同様各区から破片が出土する。復原して計測したのは2を除きすべて14区貝層内から出土したものである。

2は完器で10区Ⅲ層内から単独で直立して出土し、それを埋め込んだ穴なども検出されず特異な出土状態を示す。発見時に叢棺として用いられたものではないかと考え、中の砂も丁寧にみてみたが周囲と同様の砂が入っているのみであった。底に焼成後に打ち欠いてあけられた穴が1個ある。頭部全体に煤が付着するが、頸部のくびれたところより約1cm下から口縁部にかけては全く付着せず、この部分に何か別のものが重ねられるか覆っていたようである。出土した土層からみて、本遺跡で土器製塙が行われる前の時期に用いられたものと考えられる。

貝層内から出土したものは細別すると3種類ある。口頭部がく字形に屈折する3～5と、頸部が直行して口縁部が開く6・7、およびやや小形でろくろ水挽き調整された8である。前二者は荒くて深いかき目様の調整が施され、5には口縁部に斤痕がめぐる。9の底部は見込みが突出し、ろくろ水挽きによって成形されている。長胴形をなすものが多いようであるが、4・9のものを見ると球形に近い形態を示している。

### 3 須恵器（図6）

無台杯身（21～33） 底面を回転へら削りによって整形して体部が直線的に開く21～26と

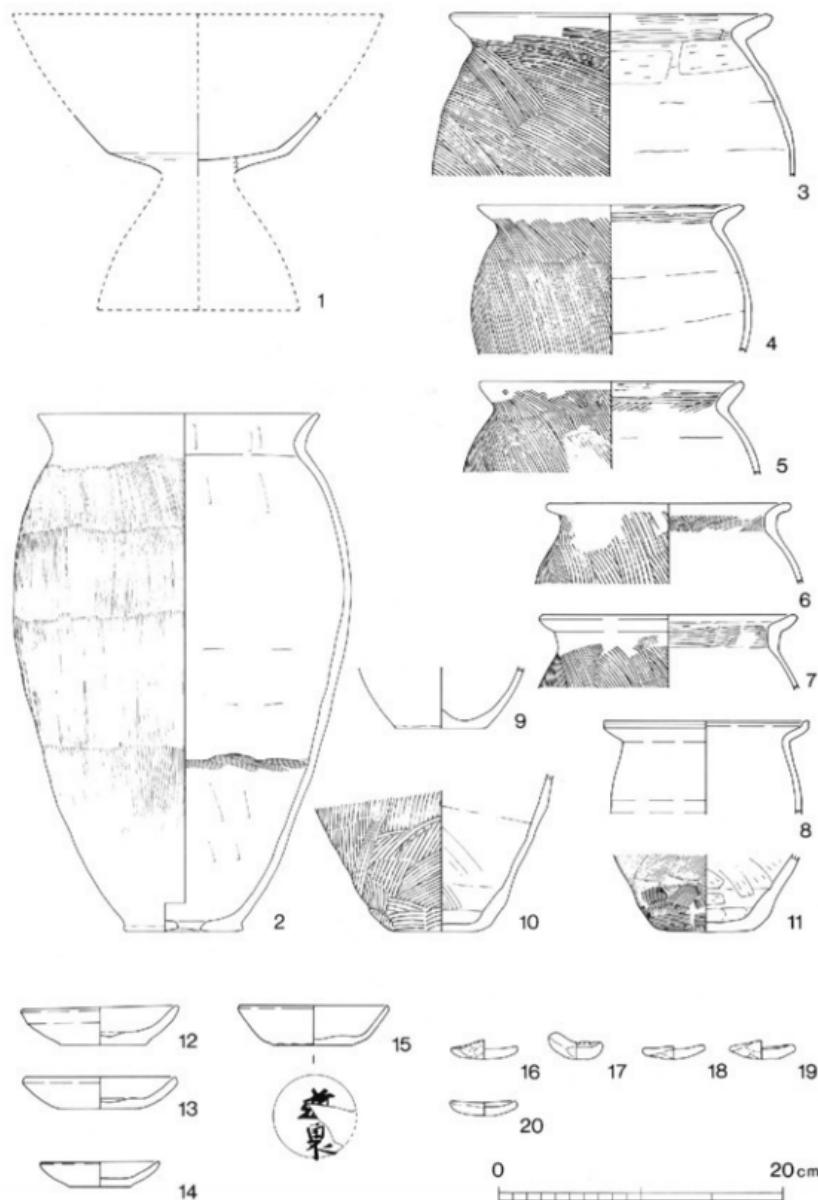


図5 弥生土器・土師器・土師器系土器実測図

わずかに丸みをおびる27および糸切り底で楕形をなす28~33がある。29は貝層ブロック・サンプリングC地点4段目から出土したもので「成」とみられる墨書きがある。<sup>(25)</sup>

有台杯身（34~36） 体部が直線的に開くもののうち、浅い34と深い36がある。すべて底面は回転へら削りを施す。

蓋（37~44・47） 頂部につまみをもつものと、平坦でつまみのないものがある。口径が14cmと19cm前後の2種がある。先の無台杯身に対応するものである。

盤（45） 高台径が17.5cmの大型品で、底面を糸切りのちへら削りによって薄く仕上げている。これのみ橙色をしている。

鉢（46） 体部の上方まで回転へら削りを施し、内底面はへら削りによって整形されている。

瓶（48） 把手を付け、胴部下半はへら削りによって整形されている。

以上の出土区・層位は次のとおり。3区Ⅱ層-34・45、9区25遺構内-41、10区Ⅱ層-21~23・28・35・42・46・48、14区貝層内-24~26・29・31~33・38~40・43・44・47、16区茶色砂-27・30・37。

#### 4 灰釉陶器（図7）

楕（51~60） 体部下半と底面を回転へら削りによって調整するものがほとんどである。51のみ底面をなで調整している。57は口縁近くまでへら削りを施している。高台断面をみると、四角形・菱形・三ヶ月形・下端の丸いものがあり、前二者が後者に比べ古い様相をもつ。56・58の内面および59の外外面は刷毛塗りによって灰釉を施釉している。60を除いた他のものも内面全体に自然釉がかかること。

皿（61） 体部下半と底面を回転へら削りによって調整し、内面の口縁部寄りに刷毛塗りによって灰釉を施す。

長頸瓶（62） 口頸部を欠損する。胴部下半は回転へら削りによって調整されている。

小瓶（63） 糸切り底で、胴部下端を回転へら削りによって調整している。

三叉トチ（64） 牛座地で楕などを重ね焼きする際に間にかませる窯道具である。トチの付着したままの製品を入手したものであろう。

以上の出土区・層位は次のとおりである。4区Ⅰ層-64、9区25遺構内-62、11区Ⅱ層-63、14区貝層-51~61。

#### 5 緑釉陶器（図8-5）

楕高台部分の細片が6区Ⅰ層から1点出土した。下底面から高台下端に至るまで施釉さ

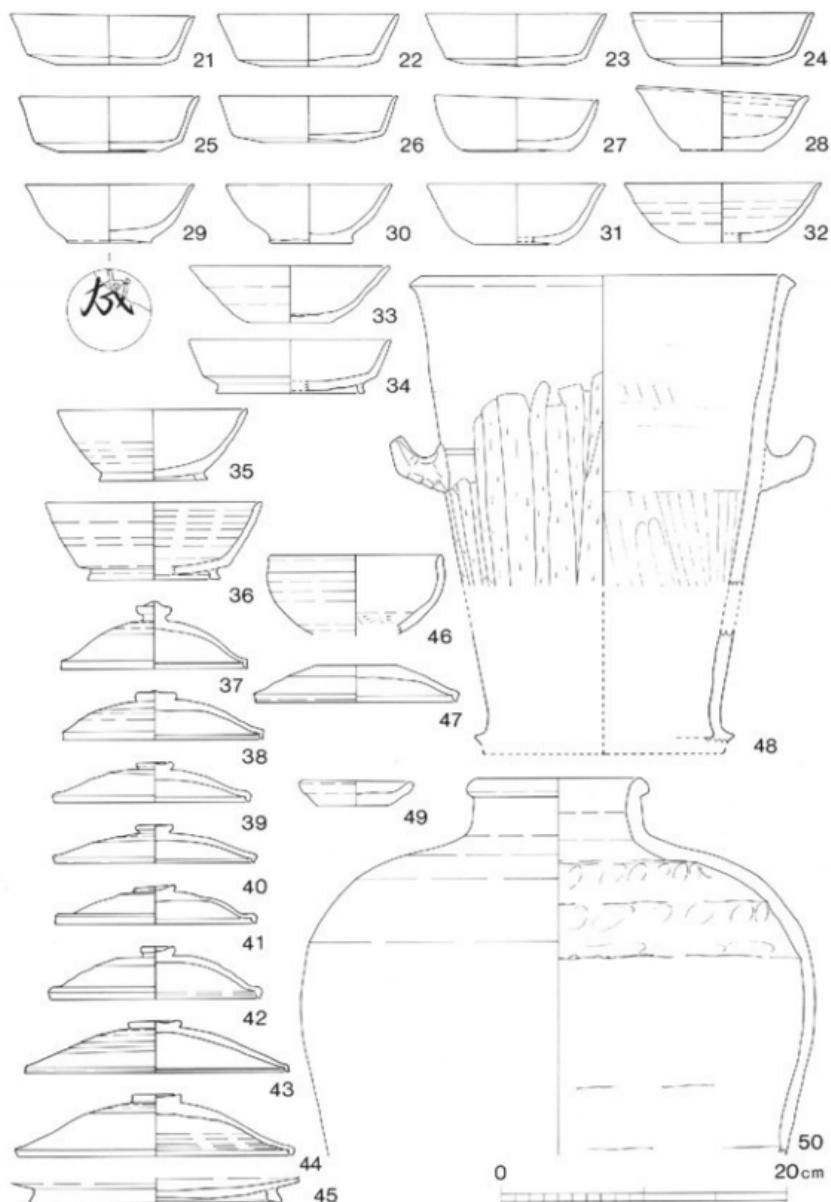


図6 須恵器・瓷器系中世陶器実測図

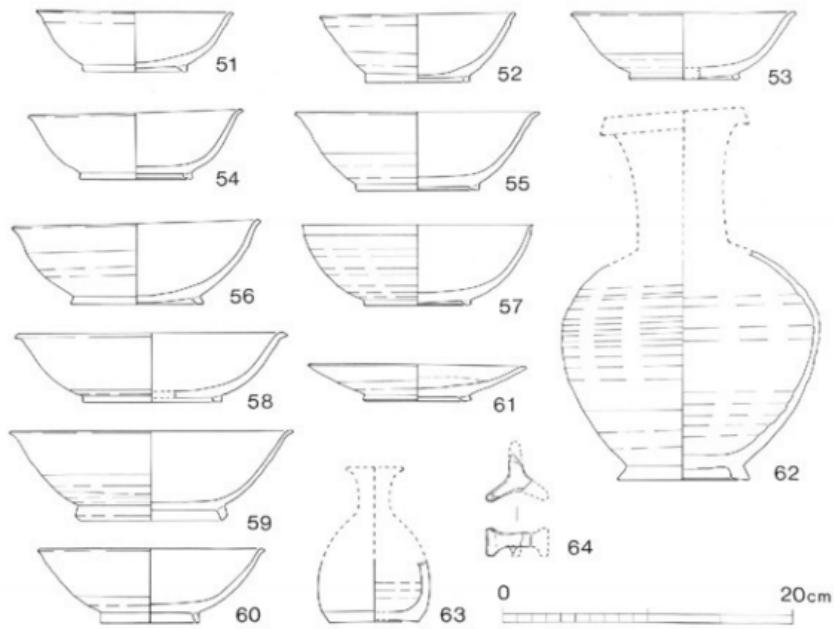


図7 灰釉陶器実測図

れている。美濃窯虎渓山1号窯式（猿投窯東山72号窯式に対応）のものとみられ、平安京周辺の製品である可能性も認められるものである。<sup>(26)</sup>

#### 6 金属製品・骨角器（図8）

刀子（1～3） 2区Ⅰ層から1点、10区Ⅰ層から1点（1）、Ⅱ層からⅠ点、14区員層から2点（2・3）の5点が出土している。1～3とも刃の最大幅0.3mで、1の刀身は9.5cmである。

鉄鎌（4） 14区員層から出土。中子とみられる部分は5mm角で、先の方は3mm厚と薄く扁平になる。この中子と同様のものが、3区Ⅰ層から2点、4区Ⅰ層から1点、10区Ⅰ層から1点、13区Ⅰ層から1点の計6点あり、3区出土の1点は3mm角である。

紡錘 3区Ⅱ層から1点出土。現存長15.8cm・直径4mmで、一方が折りたててある。紡錘と思われる（写真図版3）。

寛永通宝 4区と13区の表土面で各1点ずつ出土。ともに銅製で直径2.35cmである。



図8 鉄器・骨角器・綠釉陶器実測図

骨角器（6）鹿角製。長さ2.9cmで太い方の面に径0.8cm、深さ2cmの孔をうがってある。全体が研磨されている。用途不明。10区II層出土。

このほか、鹿角を刃物で切りおとした未製品が1点3区III層上面から出土している。

### 7 土錐（図9）

破損品を含め総数で109個あり、うち完形品が64個である。形態を4種類に細分できる。A・Bの紡錘、Cの管形、Dの球形、Eの俵形である。109個のうち98個を先の形態のいずれかに分けることができ、C～Eはそれぞれ各1個しかなく、残りの95個が紡錘形である。この紡錘形をさらに細かくみると、胴径の細いA類と太いB類があり、さらに7種と8種に区分できる。

これらのうち、A2・B4・D・Eを除いたすべての形態が14区貝層内に認められる。なお、貝層出土品は完形品39個、破損品6個があり全体の約4割を占めている。貝層以外のものの中出上区をみると、A2～9区I層、B4～6区I層、D～5区I層、E～12区III層内である。このうちEを除く他のものは、その出土区・層位からみて貝層のものと著しい時期差は認められず、貝層形成時にはそのほんどの形態があったものとみてよい。この貝層は後出の須恵器等の編年時期において触れるが、ほぼ9世紀後半に形成されている。

分類した土錐の計測値は表2のとおりである。

これらの土錐と全く同じものが、当地方において鉛の錐が一般化する以前の昭和初期ころに用いられておりその民俗例をあげておく。

Eの最も大きなものは、打漁網とか地引網に使用されている。B1・B2・B3の孔径の大きなものは、流し網に使われている。A2～A4・B4～B6の孔径の小さいものは、三枚網に使用されている。ともに海底を引網するもので、遊泳する魚のほかに海底に住む

表2 土錘類別計測値表

類別	数	長さ・cm	孔径・mm	平均重量 g
A 1	1	7.7	5.4	51.4
A 2	1	6.4	3.8	13.3
A 3	12	5.3~6.0	3.0~4.9	10.6
A 4	4	5.2~5.8	3.3~4.4	5.9
A 5	3	4.7~5.0	3.0~4.0	5.4
A 6	10	4.0~4.5	2.3~3.6	4.4
A 7	5	3.5~4.0	3.1~3.6	3.7
B 1	1	6.3	10.6	53.1
B 2	1	5.4	8.7	(31.0)
B 3	2	5.1~5.6	4.6~6.0	23.7
B 4	1	4.7	3.8	12.0
B 5	12	4.4~5.1	2.9~4.4	8.3
B 6	3	4.0~4.3	2.8~3.9	7.1
B 7	1	3.3	3.0	6.7
B 8	4	3.4~3.7	2.6~3.4	4.7
C	1	5.4	6.2	14.8
D	1	4.1	7.2	(44.0)
E	1	8.8	9.8	147.7

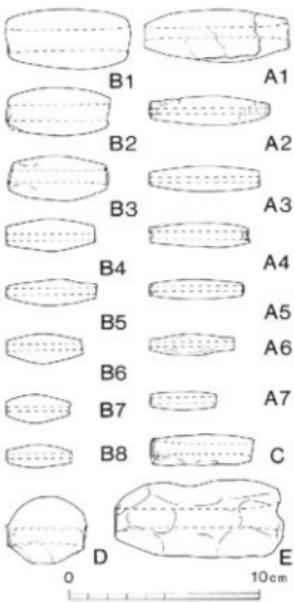


図9 土錘実測図

かれいやこちなどもとれた。主な漁獲物としては、流し網ではきす・車えび・いわしなど、三枚網ではばら・たい・またか・このしろなどである。A 6・A 7・B 8の小さくて軽いものの使用例はない。

本遺跡出土品も表面がよくすれたものが多く、こここの遠浅の海で当時にあって同じように使われたのではないだろうか。

## 8 製塙土器

### (1) 塚森類(図10-1・2)

塚森遺跡から出土したものと同様の脚が2点出土している。1は3区I層、2は13区I層出土。1の外面には叩き目とみられる痕がある。内底面はへらによって調整されている。橙色を基調とし、桃・紅色に変色する部分もある。2の内底面はなで調整。薄茶色。1に比べ土質にやや砂の混入が多く、あるいは、当地方の製塙土器1類か2類の脚かもしれない。ともに出土層位からみて、他所からの移動品と思われる。おそらく、主体をなす塚森方面か

らの土砂の移動があってそれにまじってきたものと思われる。

(2) 知多式 1 類 (図10—3)

中空の筒形脚で 1 点のみ 14 区の本堂基礎地から出土した。粘土紐による巻き上げによって成形されており、そのつぎ目が内面にみられる。内底面はへら削りによって調整する。脚下端は指でつまんである。橙色を基調とし一部紅・灰色に変化している。本資料も先のものと同様、他所から移動してきたものと思われる。本遺跡の立地する砂堆上ではじめての発見例である。

(3) 知多式 3 類 (図10—4・5)

握りはなしのままの太身で中実の脚。1 類に比べやや砂の混入が多い。9 区と 13 区の I 層から先端部分が各 1 点ずつ出土している。これも本遺跡でまとまりをもつところが全くなく、他所からの移動品と思われる。

(4) 知多式 4 類 (図10—9～10, 図11—11～37, 図12—38～52)

いわゆる角形土器といわれる細身で先端の尖がる脚をもつ土器で、脚はその長さと土質の違いによって 4 種類に分けることができる。

A (16～24) 脚下端から身の内底面までの高さが 9～10cm で、脚の身に接するところの径が 2cm 前後のもの。

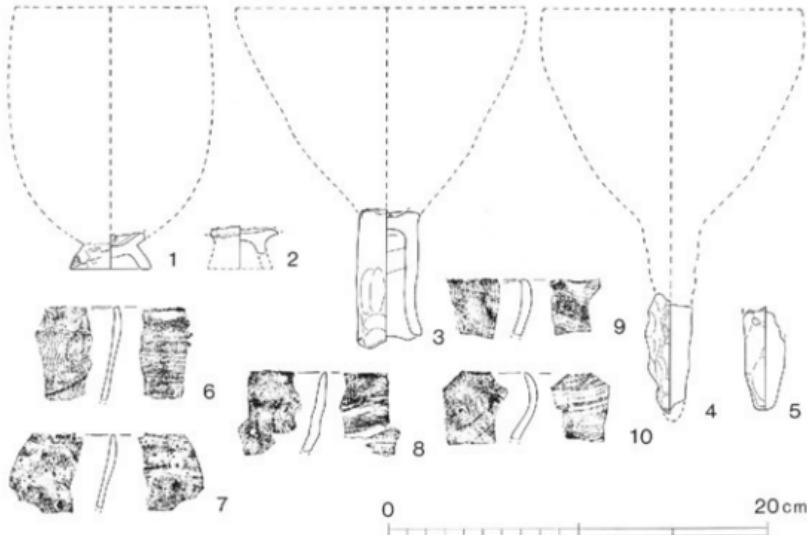


図10 製塩土器実測図(1)

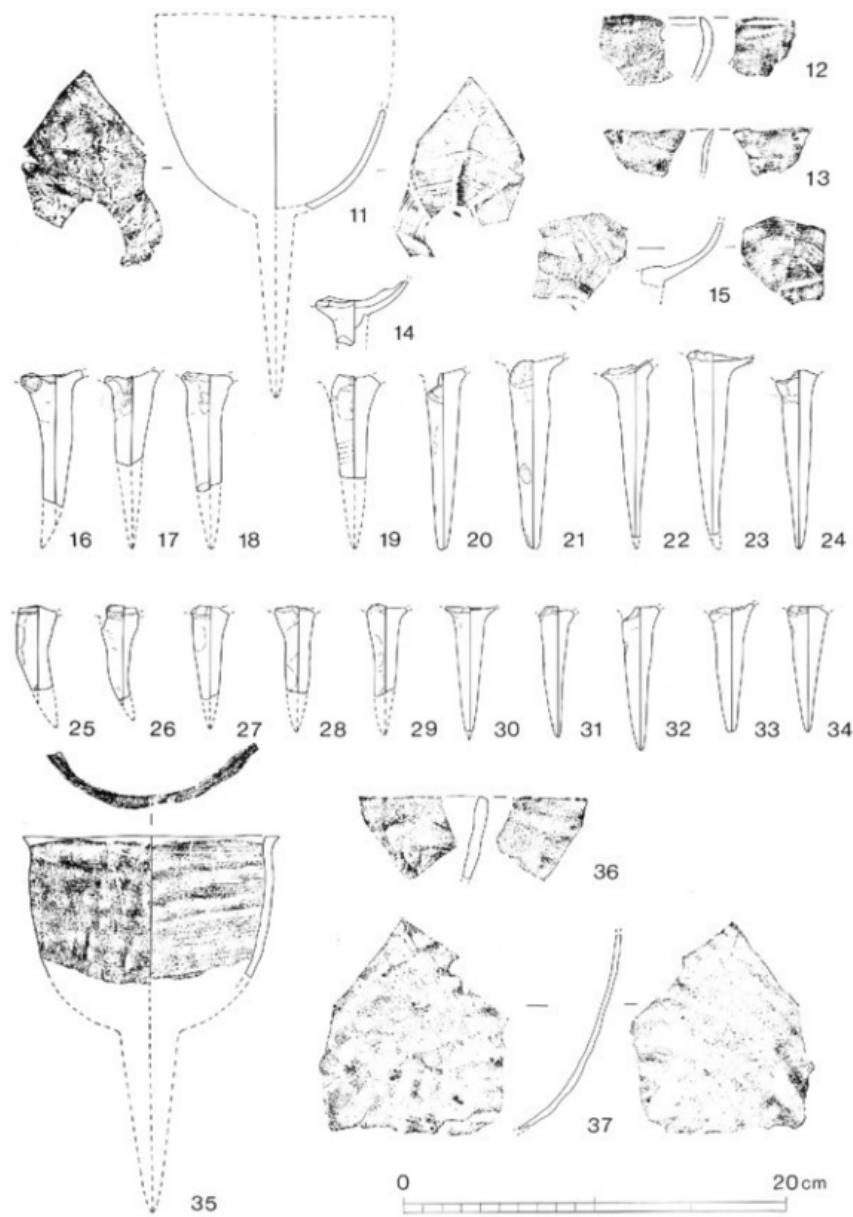


図11 製塩土器実測図(2)

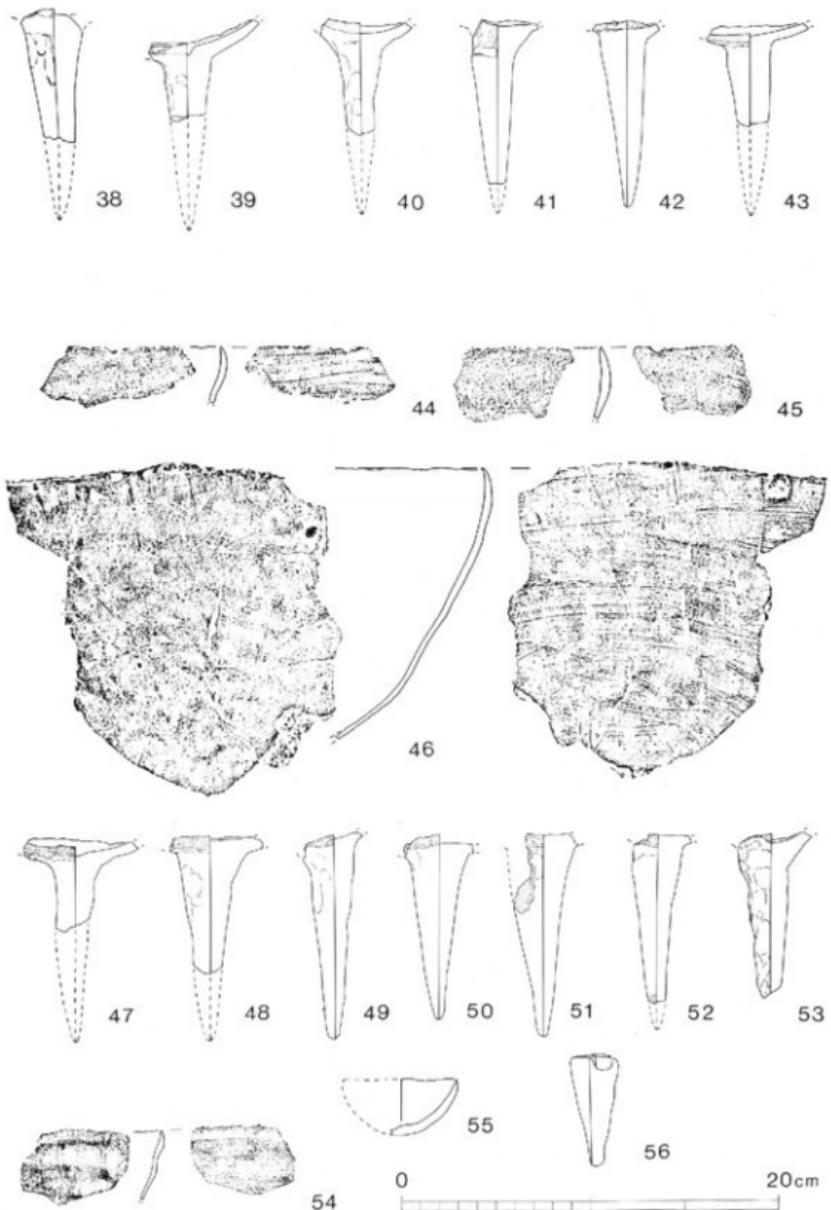


図12 製塩土器実測図(3)

- B (25~34) 脚下端から身の内底面までの高さが6.5~7.5cmと短かいもの。
- C (38~43) 脚の長さはAとほぼ同じだが、身に接する部分の径が2.5cmと大きいもの。
- D (44~52) Cとほとんど同じ大きさであるが、土質が全く異なり砂礫が多くまじるもの。

これらの脚の作り方は、19の螺旋を残す例からみて、板のようなものの平面上で粘土をころがして細長くし、その後に指などでなどの調整を施したようである。脚の中ほどで色調変化が著しく、脚の中ほどまで砂中に埋め込んで使用していたため生じた変化と考えられる。

身についてみると、脚と接合できる例は一つもないがA・BとC・Dの区別をすることはできる。それは、3区と17区および14区の製塙土器がまとまって出土するものをみるとAとBは混在しているがその中にCとDは全く認められないからである。14区製塙土器層から出土したのが、身の6~15、脚の16~19・25~29であり、6~15の身がAとBに伴うものである。これらの身の口縁は、胴部の厚みがそのまま口縁まで続き6のように口端に面をもつもの、7のように丸みをもつものと、8・13のように厚みを減じて尖がるものがある。身の外表面は土質に砂粒が少ないので、掌紋や指紋がきれいに残っている。内面は11・15の内底面に顯著に認められるようにへら状具によって削りとって整形している。色調はうす茶色を基調とし、部分的に黒・灰・灰白・桃・紅・橙色などに変化し、11の外面上にみられるように薄く剥離したものもある。

CとDはそれのみがまとまって出土する箇所は認められず各区のものを集めたのであるが、土質によって区分することができる。Cの身は土質に砂粒の混入が少なくてAとBには伴わない35の口縁に平坦面を作り出すものや、37の厚手で口端に面をもつものが該当する。37は内面がなで調整された大形の身であるが、この例などからみてCの身はA・Bに比べ大形のようである。Dは土質が砂礫を多く混入するもので、A~Cとは明確に区分することができる。44~46の身がそれで、A~Cの身の拓本と比べてもわかるように、砂粒の混入が多いので外面上に掌紋や指紋が残るもの明瞭ではない。身の作り方はA・Bと同様のものはかなで調整したものがある。46の例からみてC同様相当大きな身のようである。

以上の出土区は次のとおりである。3区I層-37・39、10区I層-20・24・35・36・38、13区I層-30~33・40、14区I層-24・52、14区貝層-21~23・44~51、17区茶色砂-41・42、18区茶色砂-43。

(5) 知多式5類(図12-53・54)

53と54は、本市大田町松崎の製塙遺跡IV区北部地区で検出され、4類とは土質と作り方が異なることから5類とされたものと全く同じ特徴をもつ。ともに4D類と同様砂礫を多く含む。53は握りはなしのままの作りである。54は口縁に対して平行にあてた指の痕が残る。色調は砂粒が多いためか4類のA～Cとは異なり茶色を基調とし、前者とは色調でも区別できるほどである。なお、4D類も5類と全く同様の色調である。

#### (6) その他 (図12-55・56)

製塙土器ではないが、その身と全く同じ作り方をして皿形をなす55や、脚と同じ作り方をして太い方の平坦面に凹みをもつものがある。55は5区I層、56は9区II層出土。

### 9 瓦

12区・15区を除いた各区から平瓦37片、丸瓦7片の44片が出土した。少數ではあるがその分布状態をみると、3・4・16・18区の東側に多く、中でも14区以北に大き目の破片が多い傾向を示している。掲図したものの観察結果を表3に示した。

#### 平瓦 (図13-1・2、図14-3～6)

37点の平瓦はすべて凹面に布目压痕が残る。側面の切り方・厚さ・胎土などによって4種類に分けることができる。

- A 凹面垂直切り、厚さ2.7cm以上、砂粒を多く含む。1のもの。
- B Aと同じだが厚さが2.5cmほどのもの。2のもの。
- C 砂粒の混入が少なくA・Bに比べ堅牢。厚さに2.4cmほどのもの (1-3・4) と

表3 瓦観察表

項目		実測箇所番号						
		1	2	3	4	5	6	7
凸面	綱の条数・5cmで	18	20	23	25	18		
凹面	端辺に平行する糸目数・3cmで	22	15	16	24	17	30	23
布目	測辺に平行する糸目数・3cmで	21	15	22	29	19	46	16
厚さ (cm)	2.7～2.9	2.4～2.7	2.3～2.5	2.4	1.9～2.3	2.3～2.5	玉縁 1.3	
胎土・色調	砂粒多 薄茶色	砂粒多 黒灰色	精良 灰白色	精良 灰白色	精良 灰白色	砂礫含 須恵質	精良 薄茶色	
出土区・層位	16区 茶色砂	18区 茶色砂	14区 貝層下	16区 茶色砂	9区坑 24下底	6区黑 褐色砂	6区黑 褐色砂	

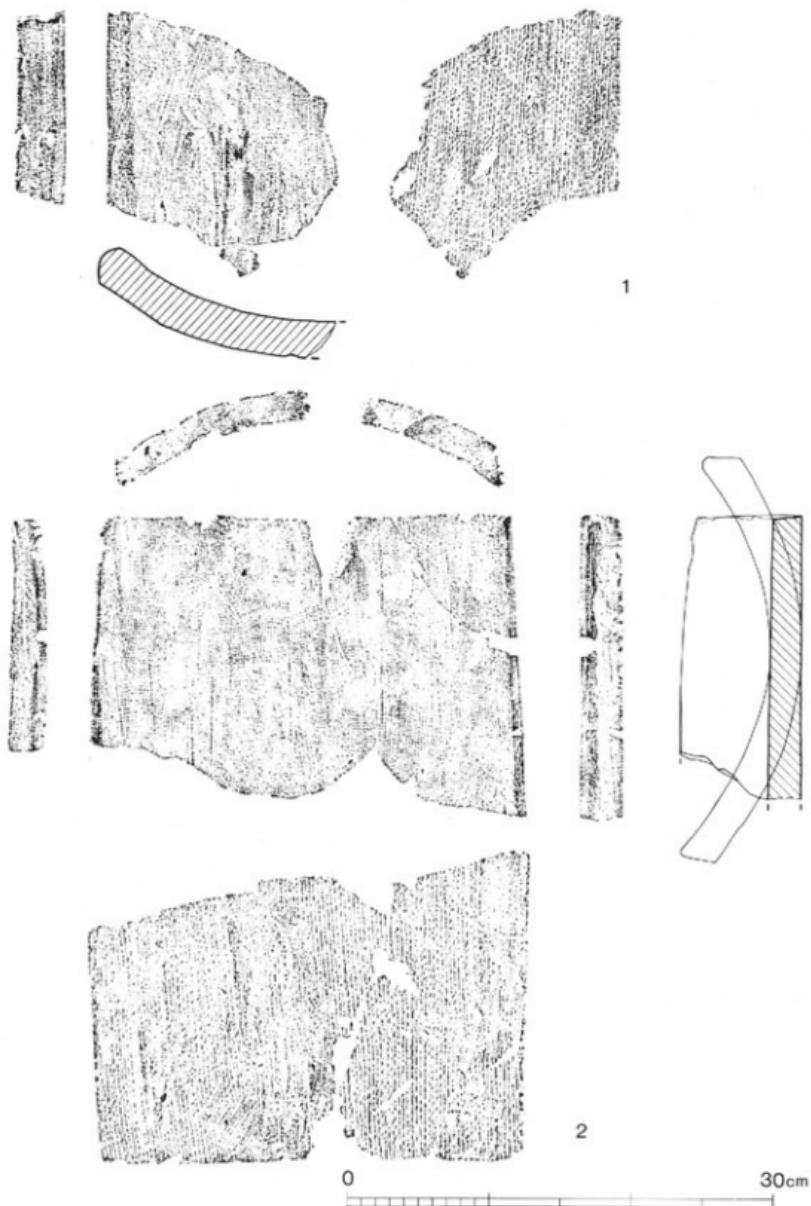


図13 瓦実測図(1)

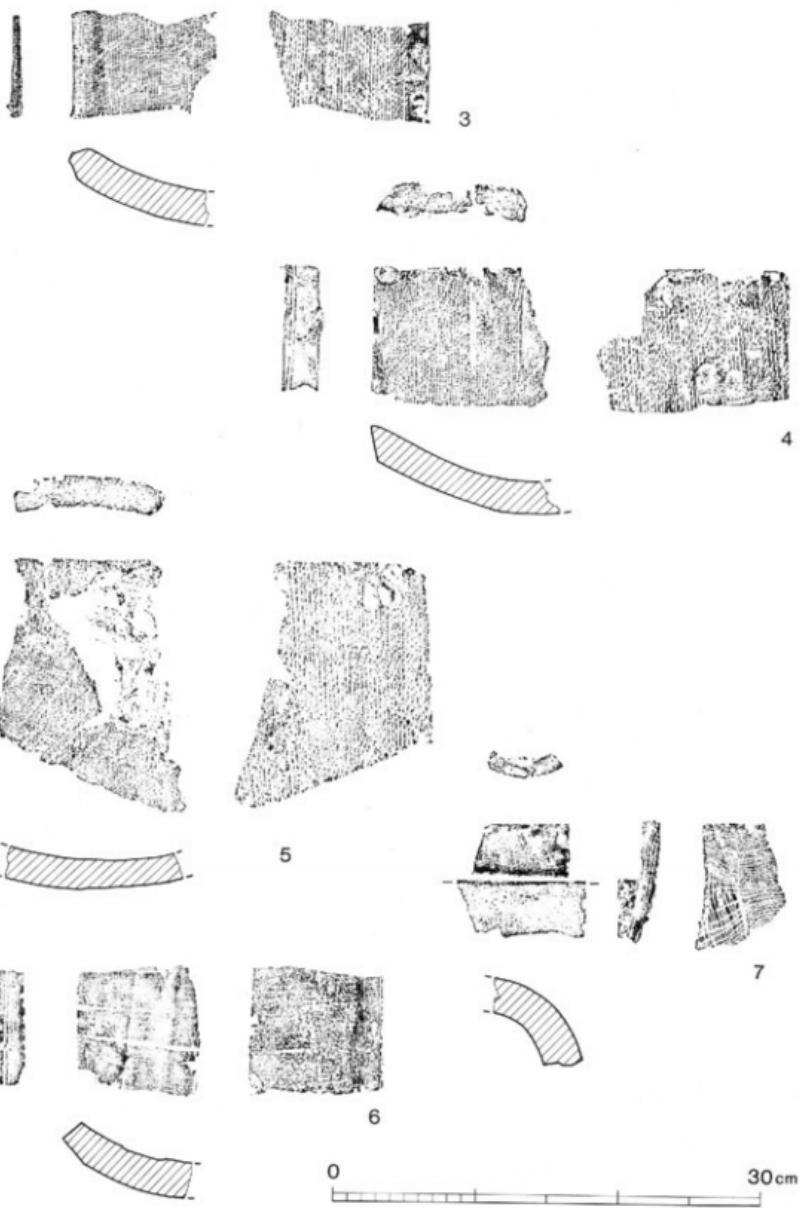


图14 瓦实测图(2)

2.0cmほどのもの（2=5）がある。

D 側面直角切り、須恵質の焼成。6の1点のみ出土。

A～Cの凸面は綱叩き目がある。AとBは凹面の側縁を丸く調整する傾向をもつ。瓦の作り方をみると、Cの凹面側縁の布目が凸面側にむかってカーブしており、これは桶巻作りでは生じないことと、側面が垂直に切られていることからみて一枚作りによると考えられる。AとBも側縁の切り方が同じであり一枚作りになると考えられる。DはA～Cとは異なり、凹面の側縁を側辺平行に、それ以外の部分を端辺平行に削りとって調整している。凹面の布目も細かく、須恵質の焼成で青灰色をしている。凹面に桶枠板の段とも見受けられる凹みのあることと、側面が直角切りであることからみて、桶巻作りになるものと考えられる。なお、C類2には5に示すように凸面に細砂を付着させ綱叩きを施す例が多くある。

丸瓦（図14-7）

胴の尻に肩土を加え、玉縁との段を作っている。内面から分割線を入れており、側面凸面側に破面がそのままのところ。

本遺跡から出土した瓦は、一枚作りと桶巻作りのものがあるようであり、その製作時期自体に船が認められる。おおむね奈良時代のものとみて間違いはなかろうが、これが何に伴っていたのかは全く不明である。瓦の出土状態をみると、14区貝塚より下の層から出土するものや、上器製塙時にうがたれたと考えられる坑24の中から出土するものがあり、これらが形成される以前の9世紀前半には瓦は廃棄されていたと考えられる。

本市名和町の北部海岸平地では、最近このような古い時期の瓦を出土する地点の発見があいついでいる。本遺跡の南約150mの塚森遺跡、その東100mの草ノ前貝塚遺跡、本遺跡の北東約350mの龍ノ脇、その北東150mのトメキ遺跡などからである。トメキ遺跡からは白鳳期の、龍ノ脇からは奈良から平安時代にかけての尾張国分寺と同型の均整崩草文軒平瓦が出土している。この地に、これらの瓦を葺いた寺院などの建造物のあったことを考慮しなければなるまい。

## 10 中世の遺物

土師器系土器（図5-12～20）

杯と皿がある。杯（12・13・15）はすべて糸切り底で、ろくろによって成形されている。12は口端が丸く厚手のものである。13と15は口端を面取りしている。15には底面に墨書きがある。「遵界」のようにも見受けられるが、界は画数が異なり、上の字は欠損しており定かではない。16～20の皿形土器は、底面に掌紋が残っており、掌に粘土塊をのせてもう一

方の掌で押しつぶして形作られたものである。口形は不整円をなす。14の皿は前者に比べ堅い焼きの製品で、出土した区域と層位からみて壇に伴う埋納品と考えられる。

以上の出土区・層位は次のとおり。5区I層—13・19、14区I層—12・14。

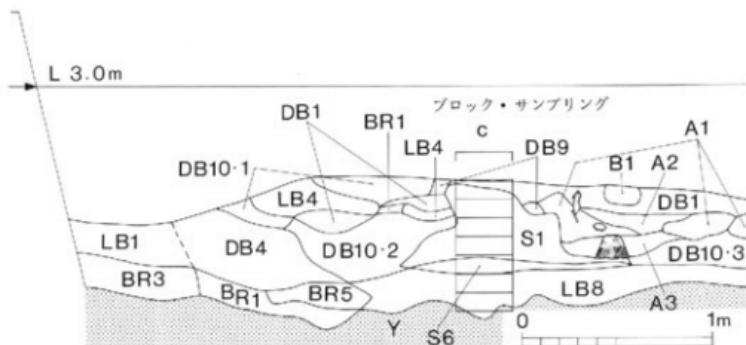
16~20の手すくねは、同様の製品が西春日井郡清洲町の朝日西遺跡や稻沢市の尾張国府跡でみられる。その用途については不明だが、年代としては16~17世紀代のものとしてとらえられている。<sup>(30)</sup>

#### 瓷器系中世陶器（図6—49・50）

49は10区I層出土の糸切り底の皿で、見込みに指圧痕が残る。知多半島で営まれた山茶碗窯の鎌倉時代も13世紀後半に焼成されたものである。50は11区I層出土のいわゆる常滑焼の壺で、口縁を外側へ折り曲げ玉縁状に成形する。口縁の特徴からみて15世紀のものと考えられる。<sup>(32)</sup>

### 11 動物遺体

#### （1）貝類（表4）



#### 土層説明

B R 5	褐色砂に茶色砂混入	L B 8	茶色砂に黒褐色砂混入
D B 9	黒褐色砂質土	S 6	貝層（マテガイ主体）
D B 10	黒褐色砂に貝殻多量に混入	A 1	灰色土（灰層）
• 1	シオフキ主体	A 2	暗褐色土（灰層）
• 2	ウミナカ類・ハマグリ・シオフキ 主体	A 3	灰色土と炭化物が混在
• 3	ハマグリ・シオフキ主体		他の記号は図3表1の土層説明に同じ

図15 貝層断面図（図17—A～Bラインの14区南端部分）

14区貝層のブロック・サンプリングを図17に示すa～cの3箇所において採取した。各ブロックとも縦・横30cm×30cmのサイズで、貝層を検出した面から下へ10cmごとに貝層がなくなるまでサンプリングし上から1・2とした。それを1.5 mm目のふるいで水洗いし、残った貝殻の種と固体数を調べた。二枚貝類の個体数については左右各殻の最大値を用いた。(38) その結果は表4に示すとおりである。

シオフキ・ハマグリ・マテガイ・ウミニナ類がまとまっており、これらが主に採集されて食されている。いずれも遠浅の内湾の干潟に住むものである。

#### (2) 魚類

ブロック・サンプリング内から脊椎骨と小骨を72点検出した。脊椎骨は2～3mmほどのものである。魚種の同定は行っていない。貝群集の示す水域環境の魚類であろう。

#### (3) 哺乳類・爬虫類

4・6・9・14～17・19区から85点出土。このほか、ブロック・サンプリング内に細片が5点ある。トリ・イヌ・ウマ・シカ・カメなどがある。

人骨と同じく京都大学靈長類研究所の江原昭善教授に研究調査を依頼した。成果をいただき次第公表する予定である。

## 12 人骨

13区から19区の北部区域内の188地点で人骨を検出した（図16）。そのほとんどは全身を残すものである。このうち、寛永通宝などの埋葬品を検出したのが33体ある。棺に使われていたと考えられる鉄釘も検出しており、この区域は墓地であったことがわかる。その時期については、前述のⅢ—4墳で触れたとおりである。

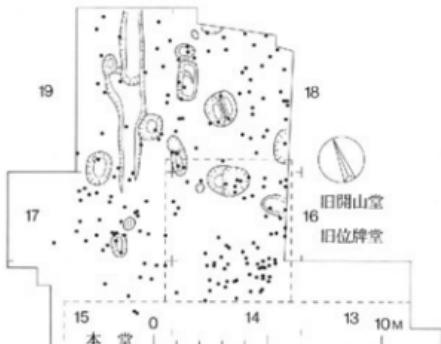
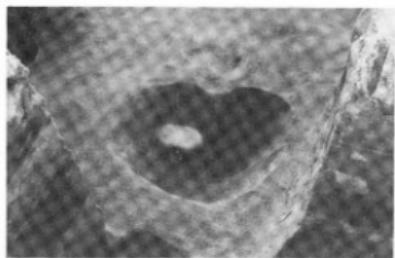


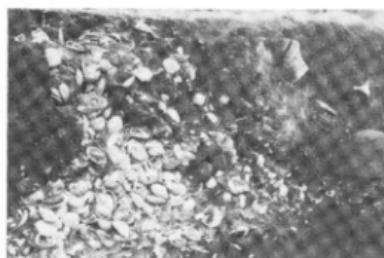
図16 人骨出土地点図

貝類組成

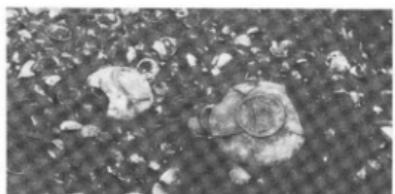
写真図版3 出土遺物



3区坑(35) (東から西)



14区貝層



14区貝層灰釉陶器出土状態



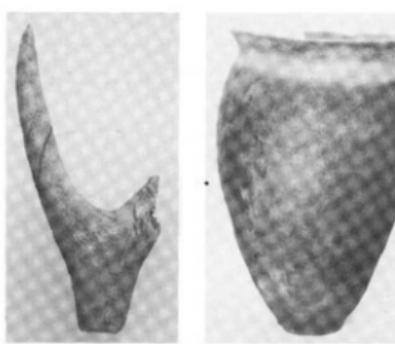
14区出土土師器壺



14区貝層出土須恵器



14区貝層出土灰釉陶器



3区Ⅲ層出土須恵器



14区貝層下混貝砂出土須恵器



11区Ⅲ層出土土師器壺



14区貝層出土灰釉陶器



14区貝層出土刀子



3区Ⅱ層出土鐵製品(紡錘)

## V まとめ

### 1 須恵器・灰釉陶器の編年時期

器形および調整法などによって編年区分の明瞭な灰釉陶器についてみてみる。14区貝層上部およびその中から出土した碗51～58と皿61は、断面方形のいわゆる角高台が付けられ、底面から体部上位にかけて回転へら削りを施し、内面に灰釉が刷毛塗りによって施釉されている。これらは、猿投窯編年の中核14号窯式の特徴を示すものであり、その量が多いことからみてこの時期が主体をなすものとしてとらえられる。同じく14区貝層出土の碗59は高台断面が三ヶ月形を呈するいわゆる三ヶ月高台が付くもので、11区出土の小瓶63の器種とともに黒笛90号窯式の特徴をもつものである。14区貝層出土の碗60は、高台がそれより新しい時期の特徴をもち、折戸53号窯式の製品としてとらえられる。9区25遺構内から出土した長頸瓶62は、灰釉陶器の中では最も古い様相をもち黒笛14号窯式の前型式の井ヶ谷78号窯式のものとみられる。

須恵器については形態変化に乏しく明確な編年を考慮できないが、先の灰釉陶器と同時に井ヶ谷78号窯式（後半期）および次の黒笛14号窯式にすべて含まれるものである。そして、灰釉陶器も含めた産地は、59が美濃窯光ヶ丘1号窯式のものであるほかはすべて猿投窯の製品である。

須恵器のうち、無台杯身25・26・33、杯蓋38～40・43・44が14区貝層の下層およびその下層の混貝砂層内から出土しており、この貝層がこの時期に形成されたものとしてとらえることができる。したがって、この貝層内に含まれていた土鍤、刀子等の出土品もこの時期のものである。また製塙土器4類各種と5類もまとまりをもって貝層の中にあり、たたき面Yもこの貝層内にその縁が入りこんでおり、このたたき面が土器製塙に伴って形成されたものとすれば、土器製塙の時期も同様にとらえることができる。その年代観は9世紀中葉から後葉である。<sup>(35)</sup>

### 2 土器製塙遺構

10区と14区にある砂などの固化したブロック（図17-X・Y）が、土器製塙作業に伴って形成された遺構ではないかと考えられる。その理由として、①これらのブロックの周囲に炭化物層および炭化物の影響を受けて黒色化した砂層が広がっている。②10区のブロックの下部を構成する層に含まれる貝殻は灰黒色に変色し熱を受けたものとみられる。③・

②から、固結ブロックの上や近辺で火が焚かれたことは確かである。③その火は14区の固化ブロック上に堆積する製塩土器層の存在からみて、製塩土器を対象にしたものと考えられるからである。ただ、ある用途をもって人為的に構築された遺構ではないようである。すなわち、XとYをみると、Xは当時そこに存在したであろう砂が固化した状態を示しており、Yは製塩作業の過程で生じた製塩土器混入層や灰が固化したものである。

これらのものを固化させた物質としては、おそらく、固化ブロック近くに製塩炉があつて、濃縮された海水（鹹水）<sup>かんすい</sup>を煮沸して塩の結晶を得るための過程（煎熬）<sup>せんこう</sup>で生じた物質、たとえば、煎熬途中で破碎した製塩土器から漏れたにがりを含む鹹水ではないかと考える。

もう1箇所製塩に伴って形成されたと考えられるたたき面的様相をもつ部分（図17—Z）がある。これと同じ土層は、本市大田町松崎の製塩遺跡において、IV区北部地区の鹹水溜状遺構周辺でも見出されている。これは、土器製塩遺跡において認められるたたき面に似た土層の堆積を示すものである。たたき面はがの周間に、炉を中心とする各種作業の過程で逐次形成されていった作業面で、がと反対の縁は炉で使用した土器が廃棄された製塩土器屑<sup>(37)</sup>が存在する。Zは、その一半を破壊されているもののX・Yや製塩土器堆積層（廃棄場）と接点をもたず、独立して存在するような様相を示しており、他の遺構との関連が不明である。

本遺跡における製塩土器層は、厚さ5cmほどで砂とまさりあい、その範囲を画することのできないような状態であるが、分布場所をみると3区・17区に各1箇所、仮本堂区に3箇所認められ、X・Y・Zを取り囲んでいるように見受けられ、やはり、X・Y・Z方面と何らかのつながりを想定できる。おびただしい量の製塩土器片があるにもかかわらず、炉・作業場を特定できないためその全容を明確にすることはできなかった。

次に上記以外の遺構も含めその全体像をみてみる。残存する部分の大きい遺物の出土量をみると、14区貝層内出土品が須恵器・灰釉陶器・刀子など約6割を占めている。また、その南の10区からは須恵器を主体として約2割が出土地している。これらは貝塚の存在とその中に含まれるものが多いことからみて、破損して役立たなくなったものを貝の捨場に廃棄したことによるものと考えられる。しかし、それだけでは理解できない点も認められる。それは、ブロック・サンプリングA地点下層から出土した須恵器杯蓋40は完器であるし、9区25遺構内のものや10区の須恵器の出土状態はそれらが単に焼棄されたとはみなしがたいからである。このことと、9区・10区に接する3区・4区からも少ないながらも日常容器類が出土しており、3区には紡錘と考えられる鉄製品があることからみて、この区域に住居のあった可能性もうかがえるのである。ただ、この区域にあり土器製塩時に設けられた坑のすべては底面に高低差があり竪穴住居の床面とはみなしがたく、他の柱穴状坑も闇

連を明らかにできず、住居址を特定できないので推測の域をでない。

一応この推測を認めて先にみた土器製塩遺構との関係をみると、製塩の作業場のすぐ横に住居があったことになる。そしてその範囲は20mの区画内におさまる。このような空間は、松崎の製塩遺跡においても同規模内に構成されており、決して特殊なあり方ではない。いずれにせよ、遺構のすべてが不明確であり推測にしかすぎない結果しか導き出すことができなかった。

### 3 知多式製塩土器 4類の変遷

本遺跡から出土した製塩土器は、4類にA～Dの4細別と5類の五つが認められた。これらは、4 A類から順に5類への変遷を認めることができる。ただし、4 A類と5類を除いた各類は現在のところ単独での発見例はない。4 A類は、松崎の製塩遺跡のⅢ—1号炉<sup>(38)</sup>にみられるようにそれのみが使用されており、伴出した須恵器蓋杯と平瓶からみて7世紀後半のものとみられる。これは4 A類の初現期と考えられる時期のもので、そこまで逆上っての4 A類と他類の伴出例は現在のところ認められない。

4 D類と5類は、松崎製塩遺跡のIV区北部地区製塩土器堆積層において混在して出土している。これに伴出する灰釉陶器は黒笛14号窯式、黒笛90号窯式、折戸53号窯式のものがあり折戸53号窯式（10世紀後半）を主体としている。

のことから、4 A類の出現した7世紀後半から5類が主体をなす10世紀後半のある時期に4 B類・4 C類が4 A類と混在して出現したことがわかる。このうち、4 C類は4 D類とは伴出していないものの、美浜町の奥田製塩遺跡や人府市の惣作遺跡では4 A類と混在している。<sup>(40)</sup>両遺跡は新しい時期の灰釉陶器を伴っており、4 C類の形態は新しい時期の所産であることは確かである。4 C類は4 D類と形態が同じで、土質が異なるのみであり、4 D類の直前のものとみなすことができる。

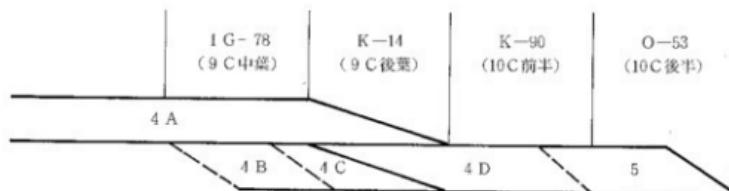
4 B類は本遺跡の3区・14区・17区の製塩土器層において4 A類と混在している。この中に4 C類がないことからみて、4 A類と4 B類、4 A類と4 C類が伴出する例があることがわかる。このうち4 C類が後出の4 D類に類似することからみて、4 B類はそれより先行するものと考えられる。その時期については、本遺跡でみるとかぎり9世紀代にすべての種類が認められるのである、それほどの差はないものと考えられる。

4 A類から5類に至る変遷を認めてその時期を本遺跡の資料と松崎製塩遺跡IV区北部地区製塩土器層の資料から編年すると表5のように考えられる。

本遺跡の14区貝附で混在した4 D類・5類は資料数が少ないが、この段式に矛盾しない。4 A類は4 C類から4 D類へと変化していくなかで消滅していったものと考えられる。

知多地方における4B類の存在については、武豊町の市場遺跡でも認められており、当地方でも普遍的な存在形態ではないかと思われる。一方、渥美地方でも同器種に脚の大小が認められており、<sup>(43)</sup> 知多、渥美地方を通じた変化としてとらえられる。

表5 知多式製塙土器4類の変遷



(注)

- 1 紅村弘・山口克 (1977) 愛知県平野遺跡。東海先史文化の諸段階・資料編1, 卷頭図版5, 70~80頁。愛知県。
  - 2 1982~1983年に本市教育委員会が発掘調査を実施した。報告書は1986年刊行予定。
  - 3 立松彰 (1984) 塚森遺跡。愛知県東海市松崎貝塚第2次発掘調査報告書付載。47~57頁。東海市教育委員会。
  - 4 杉崎章・宮川芳照・三波俊一郎ほか (1973) 東海市かぶと山遺跡第1次調査報告。東海市教育委員会。
  - 5 表採資料を東海市立郷土資料館で保管している。
  - 6 小栗鐵次郎 (1930) 上野村名和に於ける古墳 (一) 欠下 (兜山) 古墳。愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告第8, 32~42頁。愛知県。
  - 7 清田正一 (1970) 尾張と熱田神宮。古代の日本第5巻中部, 85~103頁。角川書店。
  - 8 三波俊一郎・池田伸介・吉村聰志 (1975) 名和・大高の遺跡。未調査。
  - 9 小栗鐵次郎 (1930) 上野村名和に於ける古墳 (二) 三ツ尾 (右のオカルトサン) 古墳。注6前掲書, 43~44頁。
  - 10 滅失。副葬品のみ東海市立郷土資料館で保管している。
  - 11 杉崎章 (1969) 橫須賀のおいたち、先史・原始時代。横須賀町史, 31~45頁。横須賀町史編集委員会。副葬品を東海市立郷土資料館で保管している。
  - 12 1984年に本市教育委員会が発掘調査を実施した。未報告。
- 立松彰 (1985) 東海市名和町トノメキ遺跡出土遺物。埋蔵文化財愛知No 2, 5頁。愛知県埋蔵文化

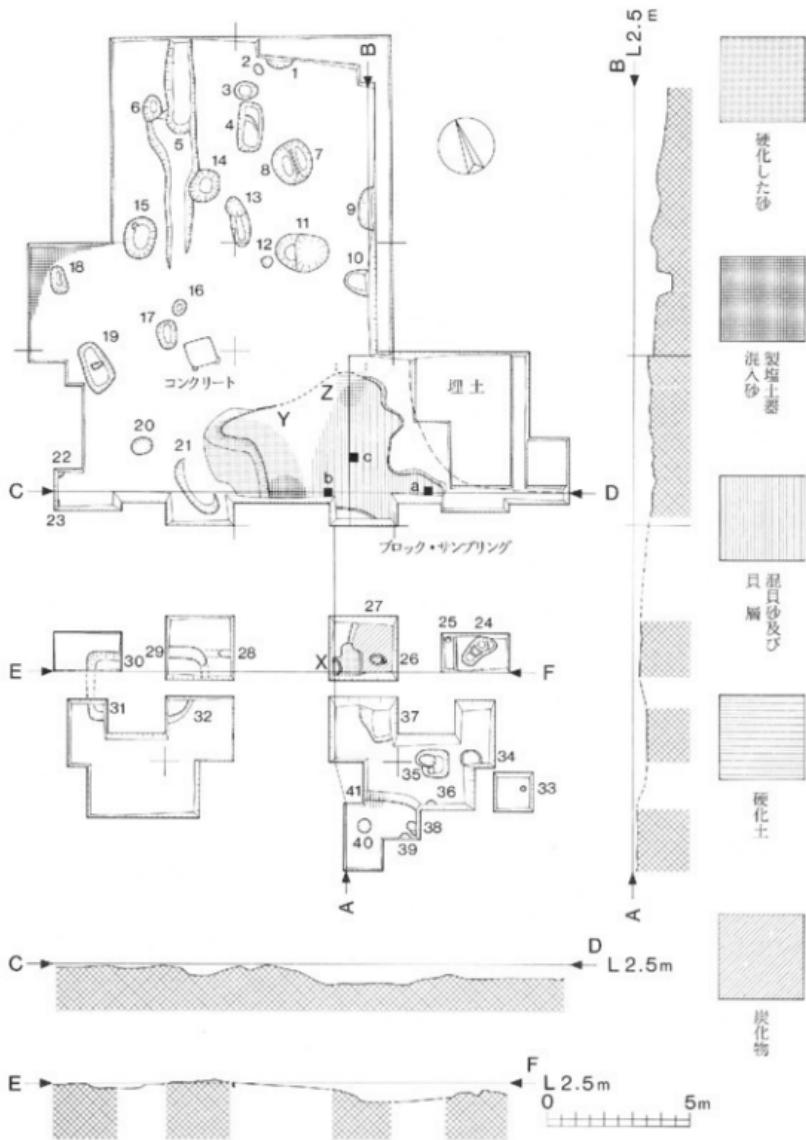
化財センター。

- 13 芳賀陽（1958）尾張国知多郡大高町発見の古瓦について。野帳7。
- 14 吉田富夫（1967）愛知県知多郡上野村名和八幡社貝塚発掘調査報告。上野町教育委員会。
- 15 名古屋市博物館（1985）尾張の古代寺院と瓦  
池田陸介（1985）名和の歴史。
- 16 吉田富夫（1972）東海市名和町章ノ前貝塚発掘調査報告。東海市教育委員会。
- 17 杉崎章・磯部幸男・立松彰（1983）愛知県東海市法秀占窯発掘調査報告書。東海市教育委員会。
- 18 常滑市誌（1976）古代。121～131頁。常滑市誌編さん委員会。
- 19 注18前掲文献。  
愛知県の地名。日本歴史地名大系23（1981）成海郷。47頁。平凡社。
- 20 杉崎章（1986）知多半島における古代漁村集落の土器。古代学研究15・16、20～25頁。
- 21 近藤義郎（1965）知多・渥美地方における製塙土器の研究。日本塙業の研究8、35～71頁。日本塙業研究会。
- 近藤義郎（1984）土器製塙の研究。青木書店。にも収められている。
- 22 池田陸介（1973）東海市名和町の遺跡。文化財調査委員報告書、1～9頁。東海市教育委員会。
- 23 「吉天明五乙巳年六月二十八眞木堂一宇再建」とある。
- 24 「宝暦六丙子九月吉日愛知鳴海瓦屋傳七」とある。
- 25 瓦について、東海市史編さん委員で書家の浅井啓吉氏に御教示いただきました。
- 26 紋軸陶器・須恵器・灰釉陶器の編年および产地については、名古屋大学文学部助手斎藤孝正氏に種々御教示いただきました。
- 27 土越については、本市大田町の森岡重治氏に種々御教示いただきました。
- 28 杉崎章・磯部幸男・宮川芳照ほか（1977）愛知県東海市松崎貝塚発掘調査報告。東海市教育委員会。
- 29 瓦については、名古屋市博物館の梶川勝氏に種々御教示いただきました。
- 30 金原宏・小沢一弘・遠藤才文（1985）朝日西遺跡II。埋蔵文化財発掘調査年報III、6～71頁。愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部。
- 31 小野幸治（1987）尾張国府跡発掘調査報告VI。稻沢市教育委員会。
- 32 常滑窯の製品については、常滑市民俗資料館の中野晴久氏に種々御教示いただきました。
- 33 具の分類については、名古屋大学大学院文学研究科の磯谷和明氏に種々御教示いただきました。
- 34 注26前掲。
- 35 横畠彰一・斎藤孝正（1983）猿投窯の編年について。愛知県古窯跡群分布調査報告III、62～73頁。愛知県教育委員会。

- 36 注28前掲報告。
- 37 近藤義郎（1958）師楽式遺跡における古代塩生産の立証。歴史学研究233, 1~12頁。  
注21前掲書、近藤（1984）にも収められている。
- 38 注28前掲報告。
- 39 注28前掲報告。注28報告の5 A類と本報告の4 D類は同類のものである。5類は近藤義郎（1980）  
が4 B類とするものと同類である。  
近藤義郎（1980）日本塩業史の考古学的研究。日本塩業大系原始・古代・中世（稿）。日本専売  
公社。
- 注21前掲書、近藤（1984）にも収められている。
- 40 杉崎章・磯部幸男・宮川芳照ほか（1972）愛知県知多郡美浜町奥田製塩遺跡。美浜町教育委員会
- 41 加藤岩蔵（1972）悠作遺跡。大府市教育委員会。
- 42 立松彰（1984）知多地方における製塩土器の編年。知多古文化研究Ⅰ, 93~114頁。
- 43 山下勝年（1984）市場遺跡。武豊町文化財調査報告3, 29~35頁。武豊町教育委員会。
- 44 注21前掲論文。

表 6 遺構表

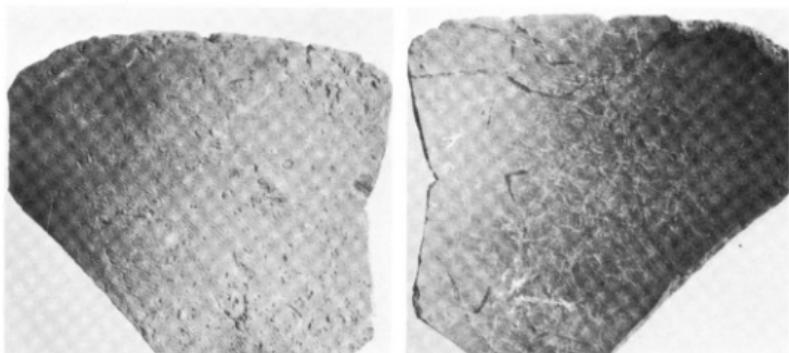
遺構番号	区域	形	態	規 模 (cm)	備 考	遺構番号	区域	形	態	規 模 (cm)	備 考
1	18	縹	深さ 101	1~4, 6~17の穴は人骨の 墓穴。ほぼ現地表面から掘り 込まれている。		24	9	坑	坑	長辺 120×短辺 60 深さ 石上 38 中小砾 66 小砾左 49 左下 36	
2	18	縹	深さ 89								
3	18	縹	深さ 194.5								
4	18	縹	深さ 105.5 廊111								
5	19	溝	北側の最も深いと ころ 109.5	ほぼ現地表面から掘り込まれ ている。前の開山堂の基礎に 平行してのびるが、それより やや前に位置して北側にもの びる。用途不明。		25	9	(落ち込み)	深さ 17	長辺 54×短辺 37×深さ 20 以化物層の下から検出。 われた石が出土。	
6	19	縹	深さ 83			26	10	坑	坑	長辺 54×短辺 37×深さ 20	
7	18	縹	深さ 105.5			27	10	落ち込み	落ち込み	深さ 28	
8	18	縹	深さ 115			28	11	溝	溝	幅 30×深さ 10	
9	18	縹	深さ 96			29	11	溝	溝	幅 39×深さ 23	
10	16	縹	深さ 139			30	12	(坑)	坑	深さ 17	
11	16	縹	深さ東106 西100.5			31	6	(坑)	坑	深さ 16	
12	16	縹	深さ 81			32	5	高まり	高まり	高さ 20	
13	18	縹	深さ 北86 南78			33	2	坑	坑	幅 16×深さ 13	
14	19	縹	深さ 109.5			34	3	坑	坑	長辺 71×深さ 20	
15	19	縹	深さ 102			35	3	坑	坑	長辺 124×短辺 96 幅 平な丸い石出土。	
16	17	縹	深さ 86.5			36	3	(坑)	坑	深さ 75	
17	17	縹	深さ 88			37	4	坑	坑	深さ 40	
18	17	坑	長辺 98×短辺 56×深さ 16			38	3	坑	坑	幅 36×深さ 40	
19	15	(穴)	現地表面から掘削。			39	3	(坑)	坑	幅 (34) × 深さ (12)	
20	15	落ち込み	瓦や石の捨場。			40	3	坑	坑	幅 44×深さ 18	
21	15	(坑)				41	3	落ち込み	落ち込み	深さ 27	
22	15	(坑)				X	10	不整形	不整形	厚さ 30	灰と砂の固結したもの。
23	15	(坑)				Y	14	不整形	不整形	厚さ 20	砂の固結したもの。
						Z	14	不整形	不整形	厚さ 5	



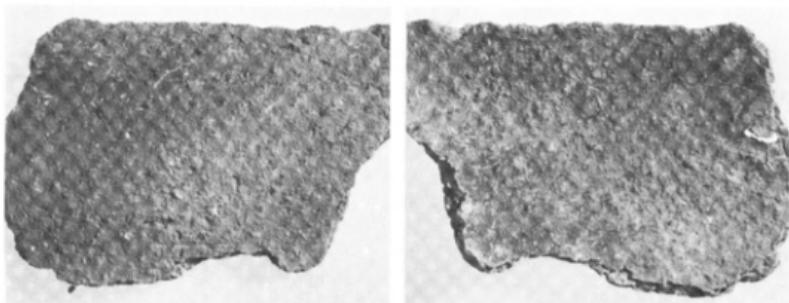
写真図版 4 製塙土器



製塙土器（左から各2本ずつ4A・4B・4C・4D類、右1本5類）



製塙土器口縁部（4A・4B類に伴うもの、左外面・右内面）



製塙土器口縁部（4D類に伴うもの、左外面・右内面）

1986年3月25日印刷  
1986年3月31日発行

## 尾張長光寺製塩遺跡

編集・発行 東海市教育委員会  
東海市中央町一丁目1番地  
印刷業 東海企画

